



# 教職大学院

## Newsletter

# No. 190

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学 連合教職開発研究科 since2008.4 2025.2.20(公開版)

## 教師の主体性を引き出し、教師が学びを楽しむ 場づくりのために

福井県教育総合研究所 教職研修センター長

富田 雅人

福井大学教職大学院と連携した仕事をする中で、ある先生の「こんなに楽しい時間を過ごして、これが仕事でいいのかしら」というつぶやきが、強く私の印象に残っています。これまでたくさんの挑戦や実績ある先生方だからこそこの言葉かもしれません。他者の話を傾聴し、時折難しい顔をしながらも学びを楽しむ教職大学院の先生方に、私自身の研修観や仕事観が転換されていったことを思い出します。今でも、教職大学院の先生方と一緒に仕事をできる日はワクワクします。

福井大学教職大学院と教育総合研究所は、平成23年度から続く「協働研究会」、平成29年度に結ばれた「福井大学大学院教育学研究科と福井県教育総合研究所との連携・協働に関する協定」、さらには、令和4年の教員免許更新制度の発展的解消を経て令和5年に結ばれた「国立大学法人福井大学と福井県教育委員会との連携・協働に関する協定」と、連携を深めています。

教育総合研究所に配属されて6年目になる私は、これまで教職大学院との共催で実施している中堅教諭等資質向上研修やマネジメント研修等で、教職大学院の先生方と一緒に計画の見直しや学校訪問に携わらせていただきました。特に昨年度は共同研究員として、FD参加、「教員研修高度化推進支援事業」における県外視察、NITSが主催する「研修マネジメント力育成プログラム(全国版)」のファシリテーターなどを経験させていただき、他県の先生方との対話の中で、捉え方の違いや研修観の違和感、

暗黙知を説明する難しさなどを学ばせていただきました。

記録と対話による省察を軸とした福井県の研修がひとつのロールモデルとなったことで、近年は県外からの視察が増えました。他県の指導主事の方々の情報交換は、新たな視点を得るとともに、自県の取組の意義や県の機関だからこそできる校種を越えた研修の在り方について捉え直す大変貴重な機会でした。一昨年前、淵本教授から「富田さんも今、全国的な渦のど真ん中にいるからね。」とお話いただいたことを思い出します。

一方で、「自分たちは本当にこの研修の意義をわかって運営ができているのか」「この研修の形を練り上げてきた先人の方々の思いは確かにつなげられているのか」といったことを問い直す機会でもありました。そもそも私自身が研修観の転換ができているのだろうか、質の向上を図る研修運営の在り方や企画の見直しについて考えさせられました。

令和6年10月、本県は「教育に関する大綱」を改訂し、子ども一人ひとりの個性を「引き出す教育」、

### 内容

巻頭言	(1)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(2)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(9)
冬期集中講座報告	(16)
教育総合研究所より	(25)
実践研究福井ラウンドテーブル(お知らせ)	(27)

探究心を持ち学びを「楽しむ教育」、郷土の歴史、自然、文化、人々等とつながり学ぶ「ふるさと教育」を進め、子ども一人ひとりを大切にする「子どもが主役の教育」を推進しています。伴って、「教員育成指標」も大きな見直しと検討がなされ、年度内に策定される予定です。私たち所員もその見直しに携わる中で、教員の力量形成や協働的な教職員集団、管理職のマネジメントに対する想いを込めました。

教育総合研究所の研修づくりでも、研修観の転換を踏まえて少しずつアップデートを図っています。今年度の新たな挑戦について、三つ紹介させていただきます。

一つ目は、校長同士が学び合うオンライン校長研修です。研究所長が発案し、自ら運営もこなしています。年間20回、1回あたり1時間の研修で、導入時10分程度の問題提起ののち、ブレイクアウトルームに分かれてグループ協議をします。所長をはじめ県内外の有識者から出される問題提起は、回によってテーマが変わります。延べで500名以上の校長先生にご参加いただきました。

二つ目は、幼稚園・こども園新規採用教員研修における、教育実践研究の導入と小中高特教員対象クロスセッションへの参加です。幼児教育支援センターのご尽力により、各園訪問による助言・指導で園

内研修と園外研修の往還も図られています。記録と対話による省察を軸とした学びが、幼稚園等の先生方よりよい実践、さらには学習者中心の学びの在り方に関する校種を越えた教師の学びにつながると期待しています。

三つめは、希望研修の再整理です。令和7年度より研究所の各センターや嶺南教育事務所がそれぞれ実施していた希望研修を「専門性向上研修」と総称し、現場の先生方に分かりやすく提示する中で、教職員一人ひとりの個別最適な学びを通じた強みや専門性の伸長、そしてそういった強みを生かした教職員集団づくりを後押ししています。

研修運営側としては、研修参加者に「主体的な研修受講」を求めがちです。しかし、教員は日々の実践や役割の中での悩みごとや問いから、OJTや校内研修での気づき、管理職面談での受講奨励、悉皆研修での捉え直し等を通して、自己の専門性向上や力量形成に向き合うようになるのではないかと考えます。だからこそ、現場の業務改善、管理職の人材育成観、そして研修機関の校内研修支援や基本研修の質の担保、希望研修の魅力化が重要です。これからも、先生方の力量形成に資する学びを楽しむ研修観への転換ができるような支援を所全体で続けていきます。



## インターンシップ・週間カンファレンス報告

### 自分自身の長期的な歩み

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

櫻井 翼

教職大学院2年目となって、金曜カンファレンスではファシリテーターの役割を担うことが多くなった。私はここでのファシリテーターを経験する機会をととても重要視しており、金曜カンファレンスではできる限りファシリテーターを引き受けるようにしてきた。私が最初にファシリテーターについて関心を持ち始めたのは、1年目9月に教育実習生と関わったときである。9月になると、福井大学から多くの学生が教育実習として、附属後期に訪れる。私は教育実

習をサポートする形で、教育実習生と関わることになった。実習生の授業直後に、他の教育実習生を交えて省察する際に、私がファシリテーターに近い役割で進めることもあった。私はこれまでのカンファレンスで印象的だったファシリテーターの先生方を模倣する形でその時間を過ごしていた。私はここで自分がファシリテーターとして上手くできなかったことを反省し、2年目の金曜カンファレンスでファシリ

テーターを経験することを見据えて、ファシリテーターについて考えるようになった。

それから新年が明けて1年目1月に、附属後期の英語科としてこれから取り組んでいくことに関する提案を受けた。私はインターン生の立場として、授業での生徒の様子を見取り、附属後期の先生方と記録を共有することを通して、附属後期英語科での取り組みを見てきた。同時に、私の中での英語の授業の在り方や、そのためにどのような授業を創っていきたいのかということに改めて捉え直す機会となった。様々な英語の授業や、そこでの生徒の様子を見ていく中で、英語科における「コミュニケーション」の重要性を再認識した。そして、授業における様々なコミュニケーションを形成していく中で、教師のファシリテーターとしての役割が重要になるのではないかと感じるようになった。そこから、私は金曜カンファレンスでファシリテーターをできるだけ経験していこうと決めた。

2年目7月、私は道徳の授業実践をさせていただいたが、その授業実践は私にとって苦い経験だった。私はこの授業実践を行うにあたって、活動の意図やねらいを持ちながら、授業構想をしていった。しかし、実際に私がした授業実践は、指導案に書かれている活動をただ進めているだけのような授業だった。「なぜ、この授業をするのか?」「この活動にどのようなねらいがあるのか」などが、生徒と十分に共有できなかった。また、授業の中で生まれた生徒たちの言葉を繋げていくことも不十分だった。私はこの授業をただ引っ張っているだけのように感じてしまった。

道徳の授業実践を終えて、金曜カンファレンスではグループ探究が始まった。グループ探究では、それぞれの興味・関心に基づいてグループが結成された。私のグループは大きく「授業」に関して興味があるグループではあったものの、それぞれの専門教科に関する関心や疑問で、探究していきたい内容がばらけていた。私はこのグループのファシリテーターとして、グループとしての方向性を定めること、道徳実践の反省から、グループ探究で行っていく活動のねらいや意図を共通認識できるようにすることを留意することにした。そのために、私は「傾聴」を心がけた。グループメンバーの思いを受け止めて、整理して、つなげていくことを大切にしたい。グループメンバーの思いを交えながら、グループメンバーと共にグループとしての方向性を定めることができた。ここでのグループ探究では、活動の見通し、目的やねらい、活動のゴールを明確化した。時には、話し合いが消化不良で終わったり、発散的になったりするときもあったが、その時はグループメンバーと活動を省察して、次回の展望を一緒に考えていった。難しいところも多々あったが、私はこのグループ探究での学びの深まりを強く感じている。

私がファシリテーターを重要視しているのは、こうした経験を通じて、今の私に必要な資質能力だと感じているからである。残り僅かの教職大学院での学びの中で、多く経験を積んでいくこと、そしてそれを授業実践にどのように活かしていくのかが、これからの私の永久の課題の一つになる。

## 夢中

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

### 帯川 夏穂

私は教職大学院の2年目から福井大学附属義務教育学校の前期課程にインターン先としてお世話になっています。昨年度は別の学校でインターン生という立場が、今年はインターンに加え、非常勤講師として音楽と造形(図画工作)の授業を週に9時間担当するほか、委員会やクラブ活動の指導にも携わっています。これまで以上に教員としてまた社会人として、自立した姿勢で子どもや先生方と向き合ってきた日々だったと感じます。インターン講師として日々

を過ごす中で、経験が浅く、不安の多い私に温かくご指導くださった先生方や関係者の皆様に心より感謝申し上げます。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

今年度から毎日授業を行い、「誰もが夢中になる授業」を目指して試行錯誤を繰り返してきました。

音楽の授業では「かもつ列車」やわらべ歌などの子どもたちがいつの間にか体を動かし、口ずさんでしまうような常時活動を取り入れ、常時活動であって

も毎回の授業で新たな発見や更なる高みを望めるような言葉がけや活動の流れを工夫して行うようになりました。また、「これから何が始まるのだろうか？」と期待感を持たせる問いを立てたり、音楽の冒険に出かけたくなるような教材に出会わせたいと思い、教材の選択に尽力しました。クラス全員が学校で音楽を学ぶことが幸せな体験になってほしいという思いが日に日に強くなりました。そのような意識が高まり、私は教材研究に夢中になっていました。

1, 3, 4年生の造形の授業では、とても悩む日々が続きました。なぜなら、初めから子どもたちの表情からはワクワク感が溢れ、キラキラした瞳で授業を迎えていたからです。では、私は何のためにいるのだろうか、造形は「遊び」と何が違うのだろうか、専門外の私が何を与えられるのだろうかと疑問に思いました。以前のニューズレターで、「違いを楽しむ」ことを私も子どもも意識できるようになりたいと書いたように、子どもの表現（行為・言動・作品）を価値判断をせず、共感することを心掛けました。その結果、方向性が曖昧な表現や作品が生まれることもありました。人はだれしも夢中になって進んだ道の先が想像よりも劣った景色となると落胆してしまいます。教師は方向性を示し、子どもの表現や発信を肯定的に捉え、思考の過程やイメージを最大限に再現できるような教材の準備と授業デザインをすることが役目だという考えに今辿り着いています。

また、探究の過程において、子どもたちは思わぬ発見や未知の知に出会うことがあります（『緑の紙粘土と青の紙粘土を混ぜると、「地球」ができる！』など）。

そんな学びの芽、瞬間的なときめきは、子どもたちと私の世界を広げる鍵だと信じています。どんな教科、環境においても、そのことを大切にしたいです。

私が授業研究に夢中になれたのは、私が「空っぽ」だと感じていたからです。幼い頃、いつの日からか、誰かの陰に隠れて、自分の思考を知ろうとせず、周りの意見に合わせ、言わば受動的に生きてきたからです。しかし、金曜カンファレンスやメンターの先生との対話、附属義務学校での教育実践研究会において自己の実践や変容を語り、他の院生や先生方の考えを聴くことで、「ああ、自分ってこう考えていたんだ。」という感覚に辿り着けました。私はやっと、自分自身に出会えたと心底思います。また、カンファレンスの運営においては岐阜拠点（M1）・福井拠点（M2）ともに全員の合意を得ることの難しさやどうしたら議論が前に進むだろうかという気持ちにも初めて出会いました。結果として大きな成果を出せたとは言い難いものの、福井大学教職大学院の文化を継承できたと思っています。教員、子どもの枠組みを超えて探究し合うプロセス、子どもの姿で語り合う教育の研究によって、理想の教師像を更新できることや、自己の課題の枠組みを広げたり焦点化させたりすることが可能だということを知りました。

少し堅い言葉ばかりになってしまいました。卒業後、岐阜県で忙しい日々を迎える前に、ぜひ一度あなたと共に語り合いたいです。

## インターンを通じて見つけた自分と生徒の成長

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属特別支援学校

小室 祐斗

大学院に入学してから、もうすぐ一年が経とうとしている。私にとってはあっという間で、たくさん悩んだ一年だった。これまで勉強よりも運動に打ち込んできたため、周りよりも知識や経験が足りないことを気にしながら、周囲についていくのがやっとだった。

インターンシップでは、初めての特別支援学校で生徒との接し方が全く分からず、しかも「好きなところを見ていい」と言われても、選択肢が多すぎて、どこを見ればよいのか、どう行動すればよいのか分

からなかった。その中で担当する生徒を決めた。その生徒は、時間通り行動することが難しく、気になるとあると他のことに注意を向けられない傾向があった。また、タブレットで動画を見たり絵を描くことが好きであり、それが彼にとって安心できる時間であるように見えた。しかし、話しかけても反応がなく、まるで独り言を言っている様子だった。このような状況が続き、焦りと不安を感じたが、一度落ち着き、その生徒が何に興味を持ち、何を好きで、どのような

ことを考えているのかを知るために観察することにした。

観察を続けるうちに、その生徒が好きなアニメ作品を知ることが出来た。そのアニメは私自身も知っている作品であり、共通の話題が生まれた。ある日、その生徒がアニメのキャラクターを描いている姿を見て「○○を描いてるんだね、とても上手」と声をかけたところ、初めて反応が返ってきた。その瞬間、これまで感じていた壁が少し薄くなったように感じた。それ以来、私は毎朝アニメの話題から会話を始めることを心がけるようにした。この取り組みを通じて、少しずつ生徒との距離が縮まり、自然な形でコミュニケーションが取れるようになった。

免許取得プログラムで三年間通う予定なので、現在は週に一度、午前中にインターンに行っている。限られた時間と回数の中で自分の課題を見つけることは非常に難しかったが、その期間は自分の考えを見つめ直す良い機会だった。

後期に入ると、生徒との関係性に少しずつ変化が見られるようになった。前期では名前や顔を覚えてもらうことすら難しく、私の言葉にあまり反応してくれなかった。しかし、後期に入り、アニメの話を通じて関係が深まることで、生徒から話しかけられる場面が増えた。「これが終わったらまたアニメの話しよう」と声をかけると、生徒は集中して取り組みを進めるようになった。また、次の授業の準備においても、以前は「何時から始まるよ、今もう五分前だから準備しよ」と伝えても動かず、授業が始まってから少

しずつ準備をしていた。しかし、今では「何時から始まるから時間見て準備しよ」と声をかけると、時間を確認してから私のほうを見て「ならもう片付けないとね」と言って、タブレットを片付けて準備をするようになった。このような小さな変化の積み重ねが、私にとって大きな喜びとなった。インターンに行くことが次第に楽しみとなり、より積極的に関わりを増やしたいと感じるようになった。

この経験を通じて、私は周囲の先生方の接し方を観察し、それを参考にしながら自分なりのアプローチを試みるようになった。生徒一人に合わせた伝え方や関わり方を工夫し、試行錯誤を重ねる中で、柔軟に対応する力を養うことが出来た。

インターンシップは決して簡単なものではなかったが、この一年を振り返ると、自分自身を深く見つめ直し、多くの学びと成長を得ることが出来たと感じている。特に、自分の立場や考え、強みを理解することで、より自信を持って行動できるようになった。

私は中学校の体育教師を目指しているが、このインターンで得た経験は、今後の目標につながるだけでなく、教育観を広げる貴重な財産になると感じている。特別支援の分野での知識や経験は、自分の教育観に役立つと考えており、インターンに参加する中で、自分の意見を持ち、疑問を抱き、自分なりの改善案や考えを他者に伝える力を身に付けることが出来たことは、大きな成長だと感じている。今後も、このインターンシップでの学びを活かし、さらなる成長をしていきたいと考えている。

## 改めて1年間の「学びの意味」を捉え直す

### 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市湊小学校 山本 実侑

教職大学院に入学し、早くも10ヶ月が過ぎた。入学したばかりで、小学校の実情や子どもたちの実態を詳しく理解していなかった以前の私に比べると、少しは成長することができているだろうか。インターンシップ先においては、実態を見取って思考し、試行し、そしてそれらを振り返ってまた思考する。そのような過程を振り返って言語化できる週間カンファレンスが位置づいているため、自分の思いや考えを表出することが習慣化していった。

私が興味関心をもっている分野は、外国にルーツをもつ子どもたちの公教育内における教育的支援で

ある。その興味関心に基づき、外国人児童と関わるのできる小学校において、インターンシップをさせていただいている。外国にルーツをもつ子どもが在籍する学級の授業を見学させていただいたり、別の教室に取り出して指導を行わせていただいたりした。週2回という少ない日数ではあるが、その限られた中で私なりに子どもたちと関わり、見取りを行ってきた。目の前にいる子どもたち、そして外国にルーツをもつ子どもたちにとってどのようなことが公教育の中で教育的支援として求められているのだろうか。

近年、在留外国人が増加している背景に伴い、外国にルーツをもつ児童も増加している。異文化に対する姿勢を醸成することが求められている一方、「言語」である日本語指導を行うことに重点が置かれた施策が見受けられている。私自身、インターンシップ先や他校における見学等で様々な経験をさせていただいてる中で、「言語」に関する捉え方について改めて考えていた。そこで行き当たったのは、「言語」とはあくまでツールに過ぎないということだ。私も英語を専攻しているため、「言語」とはあくまでコミュニケーションを行うためのツールであるということを理解していたはずだった。しかし、いざ実際に関わってみると、その観点が抜け落ちてしまっていた。外国にルーツをもつ子どもたちにとって、日本語という「言語」は、彼ら彼女らとこれからの生活であったり、学習であったりをつなぐためのツールなのである。このツールである日本語を「これからの生活や学びにつながる日本語」として支援していくことが、教育的支援として求められる一つの在り方なのではないだろうか。

また、週間カンファレンスに関してだが、いわゆる「省察」が習慣化したように感じる。この週間カンファレンスは、ストレートマスターが全員集う時間と、同学年だけが集う時間で成り立っている。ストレートマスター全員が集う時間では、「個」を意識する機

会が多かったが、同学年が集い、話し合いを行う際には「集団」という視点を意識することが多くあった。

同学年に焦点を当てて考えてみると、各々がやりたいことや思いを背負って進学してきているだけあり、各々の大切にしたいことの方向性がやはり異なっていたと感じる。しかし、同学年が授業として集う公的な時間だけではなく、それ以外の私的な時間を重ねていったことにより、「集団」として次年度どのような姿でありたいかを思い浮かべることができるようになっていくように思えた。公的な場を円滑に進める上では、やはり私的な時間における同期間のつながりや、過ごす時間も必要不可欠な要素である。非効率的に聞こえるかもしれないが、公的な時間も私的な時間も相互に作用し合っていると考えられる。夏期集中の際に読んでいたコミュニティ・オブ・プラクティスが、今までの学びを捉え直したことで意味を成してきた。互いに互いのことを知る私的な時間があるからこそ、公的な場において適材適所で活かせる点を見い出せる、背景を踏まえて情報を聞くことができ、新たな課題に気付くことができるのである。今後この時間、活動を更に豊かにする鍵となるのは、きっと私的な時間と公的な時間が相互に作用し合うことだろう。これまで自分たちが歩んできた学びの過程と照らし合わせながら、次年度も互いにつながることの大切さを念頭に置いて取り組んでいきたい。

## 揺さぶられて、悩んで、笑って

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立明新小学校 藤岡 真子

### インターン

「あんたは、にせもの先生だ」

4月、初めてのインターンシップ日。ある男子児童がそう私に言った。私は咄嗟に聞き返した。

「どうして？」

「だって、インターンって書いてあるから」

彼は、私の首からかけてある名札を指さして言った。なるほど。他の先生方は役職のところに、大概「教師」と記されている。しかしインターン生の私の名札には「インターン」と記されていた。彼はそこを見て私を「にせものだ」と言ってきたのだ。これが、私の人生で忘れないであろう男子児童との出会いであった。

彼とのユニークな出会いの日から、私は彼を目で追うようになった。

ある朝の日、私はインターンの教室に向かって階段を登っていた。すると上から彼が降りてきたのである。「おはようございます」と私は声をかけた。彼は挨拶を返さず階段を下りていった。

私と彼がすれ違う。すれ違ったところから数段降りたところで彼がふいに言葉を発した。

「先生、いいからついてきて」

え？ついてきてって言った？ 私は耳を疑った。

「いいけど、どうしたの？」

「いいからついて来いって」

私は、動揺と嬉しさが入り混じった気持ちで彼に続いた。掲示係の仕事をするようだった。掲示係とい

うのは、職員室の棚から配られた掲示物を教室まで持って行く仕事のことである。彼からの初めての私への要求であったため、私は浮かれていた。何か私に質問してくれるかな？と期待までもしていた。しかし、彼はその仕事を黙々とやるだけだった。話しかけられたことと言えば、一緒に掲示物をもって階段を上っていく途中で「これ先生がはるやつでしょ、あげる」という一言である。

はじめての要求に浮かれていた私は、ただただ黙々と仕事をするだけの彼の姿を見て、なぜ彼は私についてきてほしかったのだろうか？と疑問符でいっぱいだった。

俺の本音って何かわかる？

そう彼に問いかけてられている感じがした。

私はこの彼の姿を金曜カンファレンスで語った。すると聴き手の1人の方が彼は自分の仕事をしている姿をみてほしかったんじゃないかなと語ってくれた。

ああ、そういうことなのか。彼は私にきちんと本音を伝えてくれていたのか。私はその彼からの本音を受けとめきれていなかったのか。その事実気づいたとき、私は彼の本音を受け止められるようになりたいと強く思ったのである。

この経験から、私の中に大きな問いができた。子どもの様子から子どもの本音を見取るためには、「子どもが求めているのは何なのか？」ということ問い続けていかなければならないのではないかと。私はこの一年近くこの問いに向き合ってきた。それは、金曜カンファレンスであったり、月間であったり、様々な人々と語り合うこと、そして様々なテキストと出会う中でだ。ある時は世の中にある、アニメやドラマといった作品に子どもたちの思いが見え隠れしているかもしれないと考え、そこから子どもたちの思いを読み取ろうとしたり。またある時には、子どもたちに直接学校や先生に対しての思いを聞いてみたり。そのような中で見えてきたのは、子どもたちは、自分が誰かに必要とされ誰かを必要としていることの実感を求めているということ、自分の可能性を見つける学びのストーリーの主人公であることの実感を求めているということだ。そして、教師にできることといえば、とことんまで心と心で向き合い、時には黒子、時には登場人物として見守ることぐらいであると。この問いの答えという答えはないのかもしれない。それでも私はいつまでも満足することなく、問い続けていきたい。

彼は私に多くのことを問いかけて、教えてくれた。彼に限らず、これから出会う子どもたち、これまで出会った子どもたちがこれからも私に多くのことを問いかけて、教えてくれるだろう。私はそれに挑み、感謝していきたい。

### 金曜カンファレンス

「大学院生にもなって、こんなに心がぐちゃぐちゃにされると思わなかった。」

これが素直な私の金曜カンファレンス3の時間の感想である。

3の時間はM1の同期と来年の運営に向けて運営していくために設けられた時間である。今思うとこの時間は私たちM1のコミュニティ形成の場であり、自分が特に揺れ動く時間であったのだと思う。

前期、来年のに向けてどういうテーマでいくのかを話し合っていた。しかし、この時自分の言葉が相手に届いていないのではないかという不安に私は襲われていた。「何を言ってもダメな気がする」という不安が常に付きまとい、同期との関係性に違和感がずっとあったのだ。

夏、この違和感を捉え直す機会があった。夏期集中講座である。ここで、エティエンヌ・ウエンガーの『コミュニティ・オブ・プラクティス』を資料として、数人のM1と共に手にとって語りあったことが大きな機転となった。私の不安は私たちM1のコミュニティの在り方にあったのだと。自分たちはどのようなコミュニティになりたいのか、ということに対して目を向けてみんなで話していない。そもそもそこに価値があると感じていない人もいるのではないかと。一緒に語っていたM1の仲間たちとそのことに気がついたのである。「一人一人が自分はこの場面でのこのような役割をすればいいんだと自分の役割を感じれるそんな基盤を作っていく必要があるんだと思う」と語ってくれる子がいた。まさにその通りだと思った。私も互いにあなたってそう言う人なのね！私はこの人なの！だからさこういう時は私はこの役割ね！任せて！、あなたはこういう役割かな？任せよう！とリスペクトしあえる基盤を作っていきたいと強く感じたのだ。後期に入ってから様々なことがあった。ここで全てを記すことは難しいけれど、少しずつその基盤はできつつあると感じている。

同時にその集中では、先輩に藤岡さんにはコーディネーターの役割について考えていってほしいと言

われた。このことが私の心が揺さぶられる大きな一言となっていった。

その一言を頭の片隅に、自分の役割を意識し 3 の時間を取り組むようになった私は、だんだんと自分に対して自信がなくなっていき、同期に対して焦りを感じるようになっていった。毎回 3 の時間をみんなで議事録に書き起こしているのだが、他の同期は自分の意見がしっかりとありその意見が議事録上でも記録されていく。しかし、私はただただ、他者の考えを言い換えて誰かに伝えているばかりで、登場しないことも多くあった。その場の環境整備ばかりしている自分がいて、自分の意見がないように感じていた。自分ってなんだろう？、それぞれの役割を感じられるコミュニティって言うけれど、自分の役割ってなんだろう？、そう思うことが多くなっていった。また、何か問題が同期の中で出てきた時に、違う同期の子がスパッとほしい答えを提示している姿が目につくようになっていった。その姿を見る度、羨ましくあり、ただ一緒に考えることしかできない自分がちっぽけに感じるようになっていった。

そんな中、そういう自分の存在を同期から感謝されることがあった。藤岡さんはバラバラな同期を繋げることができる、集団としての答えを示すことができる人であると思っていると私に言ってくれたのである。自分がちっぽけだと思っていたが、同期にとっては自分はそのように映っていたのだ。私は、その同期の一言でスッと不安が軽くなるのを感じた。揺さぶられている自分も悪くないかもと彼女のおかげで思えるようになった。

人と人が関わるということはどういうことなのか？、私は今身をもって体験しているのだと思う。日常的に当たり前にあることだが、年齢を重ねるにつれて意外に向き合うことが少なくなっていったように感じる。大学院にもなると思ったのはそれが理由なのだと思う。そう考えると、子どもたちは人と関わることに全力で向き合う日々を送っているのだろう。そんな子どもたちと一緒に人と人が関わるということにこれからも向き合っていきたいと思う。

## インターンシップと金曜カンファレンスの往還

授業研究・教職専門性開発コース 1 年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

島田 涼真

1 月に入り、長期インターンシップももう少しで 1 年、同時に我々一年生もきたる長期実践を見据え、自分が何を学びたいのかを明確に意識する時期になってきた。私はインターンシップの大半を「見とり」や「生徒との関わり」に費やしてきたが、ここ最近になって私の通う福井大学附属義務教育学校の「社創(社会創生プロジェクト、協働で探究に向かう課題学習)」において私が探究したい、知りたいことが見付き、それが私のテーマになろうとしていた。この転換が起きたのは、金曜カンファレンスで同じ院生や先生方と話したためだ。金曜カンファレンスでインターンシップの内容を振り返ることで、私の中で新しい気づき生まれたのである。

金曜カンファレンスは主に 3 つの時間に分かれ、最初の 1 時間半がその週のインターンシップを振り返る時間にあてられる。インターンシップの実践は常に発見の連続である。子どもたちの変化や、現場で働く先生方の授業や学級経営を間近で見ることがで

きる。そのため、金曜カンファレンスで話す内容も発見や感動が多い。が、特筆すべきは、連続的な学びが金曜カンファレンスで行えることだ。例えば私が社創で感じたこと、先生に聞いたことを金曜カンファレンスで共有する。すると話し手は話していく中で〇〇はどういうことだったのだろう、あの活動は何のために行ったのだろうと新しい気づきが生まれ、さらに聞き手からの疑問などをぶつけられることで、次に見とるべき目標や新たな視点が開かれるのである。そして出てきた疑問や気づき、視点を次のインターンシップでの実践にぶつけることで、課題の解消を行い、そして次の金曜カンファレンスに繋がっていく。この繰り返しだ。実践と語りでの往還、学びをらせん状に昇華していくことがこの金曜カンファレンスの意義なのではないかと社創の学びを深めていく中で強く感じるようになった。

私はインターンシップで時おり、なにを見ればいいのかわからなくなる時がある。自分の中で今回は

これを見とろう、あの子は一週間でどんな変化をしたのかな、と目標を立てているうちはいい。だがその目標が解消され、あまり変化が（自分の中で）見られなくなったとき、インターンシップの実践での学びが色あせるような感覚に襲われるのだ。原因は明確だ。省察が不十分なのである。その時その時で生じた課題や目標、見る視点から学べたことを後に振り返ったとき、そこから次のゴールが見えないまま実践に進んでしまうと、学びに価値を見出せなくなるだけでなく、見るべき時、見るべき機を逸してしまうのだ。金曜カンファレンスでの省察は、そうした不十分な省察を助けるためにあると思っている。自分一人だけでは獲得しえなかった知識、あるいは自分とは異なる立場から放たれた意見と発見。経験豊富な先生方と、自分より深く、長く現場に携わっている先輩方、同じ院生の意見は学びを深める一助になる。

これまでのインターンシップは現場になれるだけではなく、子どもと関わり、自分の興味や学びたいことを探し醸成する期間だった。これから二年生となる上で、私たちには長期実践報告というゴールが設定される。そのため、実践の場においては何を目的に、どんなところを見るのか、を明確にし続けなければならない。そこで金曜カンファレンスの時間を用い、自分の学びを省察し、学びを練り上げていくことが次の一年を有意義にしていくのに重要である。私はまず、社創をより深く知っていききたい。そのためにも実践と省察、インターンシップと金曜カンファレンスの往還を通じて、何を学んだのか、何を見とったのか、を常に意識し続けたいと思っている。



## ミドルリーダー/マネジメントコースだより

### 組織作りは難しい

学校改革マネジメントコース2年/社中央第一こども園 山田 晶子

入学してもうすぐ2年目も終わろうとしている。私の勤める園の職員は、一匹狼気質の集団。どうやって組織を作ろうか？悩んでいても進まない、こうなったら走りながら改革を始めるしかない歩みだした。「公開保育をする」と聞けば職員を連れて公開保育に出掛けた。園内研修として、大学の先生方に保育を見て頂いた。そして、職員間で何度も何度も話し合いをしながら「それ面白そう」「やろう」と言いながら、ようやく改革という道が開き始めた。

しかし、11月末に若手職員が、「辛い」「やりたいことができない」と訴えてきて事の深刻さに気付かされた。それは、ベテラン職員が若手職員のすることにブレーキをかけていたこと。改革が上手くいっているように見えたが、実際は形だけで上手く回っていなかったと気付かされずごくショックだった。

改革としては、私の勤める園のタイムスケジュールの変更と、異年齢交流活動の内容をみんなで話し合いをしてコーナーを決めた。みんなで相談をしてそれぞれに納得していたと思っていた。「子どものた

めに」を合言葉にしていたはずが、いつの間にか「保育者自身のやりやすい保育」になってしまったようだ。

冬期集中講座があり、辛い現実を打ち明けた。清川先生に「いいね～チャンスだよ」と、いろいろなアドバイスを頂いた。私は、「詰めの甘さ」ということをいっぱい気付かされた。

組織には、みんな共通の「共有ビジョン」があればいいと思い作った。職員と話し合い目的を考えた。そして私は、皆と一緒に取り組もうと、輪の中にみんなを入れようと必死だった。「分かった？出来そう？」と確認しながら一人で頑張りすぎた。しかし、昨年夏にコミュニティオブ・プラクティスを読んで学んだはずなのに私は忘れていた。組織のコミュニティには、コアグループ、アクティブグループ、周辺グループ、アウトサイダーがいる。みんなをコアグループに寄せるのではなく、その時の活動によって寄ってくればいいもの。アウトサイダーでもその時（自分の得意分野）が来ればコアグループになる時もあるはず。

若手職員が活き活きと保育をしているところへ、ベテラン職員を無理に引き込んだために、反発が起きたようだ。様子を伺わせ、できそうなら中に入れば良かったのに…。私が焦って、改革を急ぎ進めようとしたためトラブルが起きたようだ。

冬期集中講座の1日目の終わりに「目的には目標とセット」という話をして頂いた。私の勤める園は共有ビジョンという目的を作っておしまいだった。目的達成のために、どうするかというステップがなかった。だから、目的が決まってもそれぞれみんながいろいろな方向に向かって進んでしまった。私は、本当に詰めが甘いことに気付き悲しくなった。でも今回、失敗に気付けたという点においては、大きな成長となった。私がやるべき事は、一度立ち止まり、今までやってきたことの整理整頓をし、もう一度組織を立て直すこと。

ここ一年若手職員が急成長をしている。子どものつぶやきを拾って保育に活かす。本当に楽しそうに保育をしている。ベテラン職員もアンテナを立て上

手に保育をする人もいる。「今、この瞬間の子どもの学びのために、保育者は環境や援助をどうすればいいのか、自分のクラスだけでなく広い視野で子どもを見よう」ということで始まった改革。改革の目的のためにどう準備するのか？期限を決め丁寧に取り組みたい。今回、子どものためというものが、保育者のやりやすいものになってしまっていることに気付いた。今一度、子どもが主語の保育になっているかどうかを確かめていかなければいけない。

今回の冬期集中講座でじっくりと考えることが出来た。組織を作るって本当に難しい。みんなで考えたことを話し合って改革として進んでいくのだが。組織が同じ方向を見るって本当に難しい。私は伴走者のはずなのに時々焦って、つい先頭を走ろうとしてしまう。ちょっと上手くいっていると「大丈夫」と安心して手を離してしまう。コアメンバーグループが出来つつある今、職員と絶えず話し合いをしながら「目標」という設定の進捗状況を確認しながら、一步一步確実に進めたい。

## 年明け、長期実践研究報告を綴る中で…。

学校改革マネジメントコース2年/岐阜市立加納中学校校 今井 良昌

年末の集中カンファレンスを終えたのち、発熱で体調を崩してしまった。大晦日も正月の三ヶ日も、部屋に隔離されて寝込んでいたので、年明けの福井でのカンファレンスは久々の外の世界であった。そんなコンディションで乗り越えることができるのか、と不安に思いながら臨んだ三日間であった。

長期の実践を振り返る意味について共通理解し、互いの進捗状況などを交流したのち、長期実践研究報告を綴る時間となった。年末のカンファレンスののち、冬休みを活用して書き進めておく予定だったが、全く予定が狂っていたので原稿は全然進んでおらず、心は焦っていたが、この三日間はこれまでの自分を振り返り、自分の教師人生の原点に立ち戻るいい時間になったと思っている。

今までの自身の歩みを、「教師になるまで」、「教師になってからがむしゃらにつき進んでいた時期」、そして「それまでの自分の指導を立ち止まって振り返った時期」、「連合教職大学院に入学して学び、実践に取り組んだ時期」の、大きく四つの時期に分けながら、執筆を進めていった。

その中で、なぜ自分が今教師となっているのか、という原風景を思い出しながら執筆をしていると、4月の実践的な自己紹介の時に語った時とはまた違った過去の自分が見えてきたことが刺激的であった。

学びの楽しさに気付き、仲間と協働したり、巻き込まれて行ったりしながら共に成長してきたこと、学校という場での様々な体験が絡み合っていて、現在につながっていることに気付くことができた。だからこそ、学校が全ての児童・生徒に対して魅力ある場であってほしいという思いをもって教師となり、自分は今ここまで取り組んできたのだという思いを再認識することができた。

とはいえ、かつての自分を振り返ると、本当に生徒のことを考えて指導してきたのか？勝手に望ましい生徒像を思い描き、それに子どもを無理やり適合させようと、ひどいことや無茶なことをしていたのではないかと過去の自分に疑問を抱きながら、その未熟さを綴りながら自身との対話を繰り返し、時間は過ぎていった。結局年始の三日間を終えても、まだまだ道半ばで、進捗状況は絶望的であった。原稿執筆の遅れに対しての焦りや、読み手の先生への申し訳

なさで心苦しい気持ちはいっぱいであったが、自身のこれからの実践へのやる気は溢れてきたのが不思議であった。

一昨年の4月に連合教職大学院に入学し、ここまで学びを続けてきたのだが、この期間を通して、主体的で対話的で深い学びとはこういうことか、と自分の実践をもって体験できたことは、何よりの財産だと思っている。

自身のこれまでを振り返り、教育改革の動向を知り、先達の長期実践研究報告を読むことで見通しをもち、実践に必要な知識を、いくつかのテキストから選択しながら得て、そして様々な立場の実践者との対話を通して得られた新しい気付きを、それぞれの実践に生かしていくという探究のサイクルが仕組みられていた。2年目の今年は、そのサイクルがただ単純に繰り返されているのではなく、探究のサイクルの中で学んでいるからこそ、新しい気付きがどんどん生まれてくるということに気付くことができた。

気付いたからこそ、このままではダメだ、軌道修正したい、と反省することも多いのであるが、こんな仕

掛けはどうであろうか？こんなこともしてみたい！という、やってみたいことがどんどん頭の中にあふれてくる。自分のこととして、実践を行い、その先になりたい自分、輝く自分を思い描くことができたのには驚きであった。

生徒の主体的な学びを生み出すには、まず、教師自身が主体的な学びをしなければならぬ。生徒の学びと教師の学びは相似形である、私自身が連合教職大学院で主体的で楽しく学んだ経験を、今の勤務校の同僚にも感じてもらいたいと、蒔いた種が少しずつ育っていることを感じる今日この頃である。今年度、毎週かかさず行ってきた道徳の授業の勉強会に参加している若手の同僚が、「今年はすごい財産が貯まった」、「来年も！」、「明日の道徳が楽しみだ」と話している姿を見て、嬉しい気持ちになる。もつとできないかなと、やる気が出る。

岐阜と福井を往復しながら、様々な人との出会いを経て、教師として成長できたこの経験を、何とか報告書にまとめ切りたい。締め切りまでの残りわずかな時間、闘いきります。

## 問い続ける

### 学校改革マネジメントコース2年/同志社中学校 田畑 彰子

入学してから、「自分」をじっくりとみつめ直している。教職大学院は不思議なところで、常にもやもやさせられる。月間カンファレンスの朝は、あれもこれも出来ていないと、ため息交じりでテーブルに着く。様々な立場の方々と一緒にグループになり、語り合う。いつも「心理的安全性」があり、自分の抱えている悩みや課題などを話せてしまう。そこでの対話を通じて、新たな視点をすることで、次の問いがうまれるのだ。あつという間に時間が過ぎてしまう。自分が何を大事にしている、どう思っているのか。語りながら、自分自身を再認識している。そして次をやってみようと思えてくる。

学び続ける集団にどうしたらなるのか？校内研修を推進する委員会にいる私は、即効性を求めている。でも答えを誰かが教えてくれるわけではない。理論書や先輩方の実践報告書を読むだけでなく、読み合って語り合うことで模索していくのだ。その面白さに気づかされたことは、自分にとって本当に大きい。そして、自分は何なのか。どんな授業をしたいのか？教育観、学習観、学校観。自分の中のあたりまえ

は子どもたちにとっておしつけでないのか？日々の忙しさを理由に曖昧にしていたところを捉えなおしている。

学内では、今年度も昨年度に引き続き、「生徒たちだけでなく私たち教員も探究していく」を柱に、学びあえる研修づくりを行っている。福井大学附属義務教育学校への一日研修や、4人グループでお互いの授業をみとりあい、各グループでテーマを決めて授業をつくらせていくことに取り組んでいる。そもそも、みとりって何？なんのために？など、「みとり」を勉強しようと、教職大学院の先生方を学期ごとにお招きして、一緒に授業をみとって交流会をもった。一学期は参観者だった。交流会の前に、森田先生から『みとるとは自分の授業が変わること、どう子どもをみとっているのか？子どもの思考の流れをみとる。授業者のよさ、チャレンジしているところを発見する。子どもの学びの中にストーリーが生まれているか』とお話いただいた。分かっているつもりで、まだ掴んでいないことを痛感した。二学期は、私が授業者になった。二次方程式の文章題に取り組むところだが、た

だ答えを導き出すのではなく、なぜそうなるのか？を子ども一人ひとりが考えるような授業にしたいと考えた。自分が見えていない生徒たちのストーリーを聞くこと、子どもの学びのプロセスを価値づけしてもらえたことは貴重なことで、自分の授業への考えを理解してもらえたことも素直に嬉しいと思った。自分のこういう感動を同僚たちとたくさん共有できたらいいなと思う。

日頃から学び合うことのできる校内研修の充実は、常にテーマにある。提案側も参加側も「やらされ感」をどうなくすか。お互いに疲れないものはどうしたらいいのか。悩みはつきない。教職大学院の先生方に学校に関わっていただき、「刺激」をいただいたことはとても大きい。委員会でのやってみよう！こうし

たい！を協力していただいていることに感謝しかない。

こうして考えてみると、教職大学院は「自分との対話・人との対話」である。自ら考え、自分に問い続け、他者と学ぶ楽しさ、ともに成長する場である。色々な方々との対話で、気づかされることが多くある。福井の先生方にとって普通なことが、自分の学校では普通ではなかったりする。できそうなことは試していきたい。アドバイスをいただけることも、頑張ろうと思える原動力になっている。

私は今年度ではなく、来年度に長期実践報告書を書くことにした。委員会のメンバーを外れる私が、どう自走していくのか。じっくり実践していきたい。学び続けるとは、自分に問い続けること。多様な意見に触れ合いながら、問い続けたい。

## 視座の高まりと学びの種

学校改革マネジメントコース1年/小浜市立小浜中学校 泉 浩

4月の私は、現任校に異動してきたばかりということもあり、自分で言うのは恥ずかしいがやる気に満ち溢れていた。また、研究主任の立場をいただいたこともあり、どのように研修を行っていこうかとあれこれ考え気持ちが高ぶっていた。そのような状況にあった私に、新たな学びの場として4月から加わった教職大学院という場が、2つのことを学ばせてくれたのである。

「授業と研修は相似形である。」大学院での講義で聞いたこの言葉に、私は深く頭を悩ませることになった。これまで私は、授業において生徒主体の授業を心掛けてきた。また、日々の授業において生徒の学びがどうであったかと振り返ることを大切にしてきた。生徒の姿を見取る中で「そうか、分かった」と喜ぶ生徒の笑顔があれば、教員になってよかったと感じたものである。

授業についてそのように考えていた私に、先の言葉が大きな問いを与えたのである。「授業と研修は相似形」。相似形であるなら、授業を研修に置き換えた際、生徒に該当するのは誰であろうか。それは、本校の先生方ということになる。そうであるなら、先生方にとって学びがある研修を考え実践していくことこそ、これまで私が大切にしてきたことと核を同じにすることではないのか。この視点は、4月のスタート

時「自分が」がんばらなければいけないと考えていた私の視座を高くしてくれた。私一人ががんばるのではない。私がんばるのは、本校の先生方とともにがんばれる環境を創ることだと、考えを改めることができた。

4月にその言葉と出会えたことは幸せであった。出会いはすべて縁であると言うが、この言葉と出会えて本当に良かった。まさに私を救ってくれた言葉である。

教職大学院での学びも、まもなく1年が経とうとしている。これまでの学びを振り返ると、もう一つ学びがあったと感じる。それは、学びの種が自分自身の中にもあったということである。

4月からこれまでの学びの中で、何度となくカンファレンスを行った。それにより、これまでの自分の実践を振り返る機会に恵まれた。大学と聞くと、高名な先生方に専門的な知識を教えてもらい自分のものにしていく、という学びを予想していた私にとって、教職大学院での学びは大きく異なるものであった。学ぶ種は自分の中、つまり過去の自分の実践の中にあつたのである。語ることを通して、これまでの自分を振り返ったり、同じグループの方と語る中で自分が気付いていなかった価値に気付かされたりすることが何度もあった。

語ることは、自分がどのようなことを大切にしてきたのか、自分がこだわってきたことはどのようなことであったのか明確にする効果を伴うと思う。この時間があつたことで、過去の自分が今の自分を肯定してくれているように感じた。自分はどのような教育観を持っていて、それを今後も大切にしていってほしいのだよと。

1年も経たない大学院での学びを通して、2つの大きな成長を感じる。この学びがなければ、今頃どうなっていたらと恐ろしくもある。大学院での学びは今後も続く。これからも、カンファレンスを中心とした語る時間を大切にしていきたい。同じ大学院で学ぶ先生方と語る時間、そして本校教職員と語る時間、そして何より自分自身と向き合い語る時間。どの時間も、かけがえのない学びを私に与えてくれるはずだ。

## 問いを掴む

### 学校改革マネジメントコース1年/福井市社北小学校 伊澤 英美

「省」。毎年12月に清水の舞台で今年の漢字が発表されるが、令和6年度のここまでを振り返って、自分の一字は「省」だと考えた。

4月に教職大学院に入学し、まもなく1年近くが経とうとしている。自分にとっての大学院での学びは、月間カンファレンスで日々の実践を語る中で、はっきりしない引っかかりや違和感を言語化し、対話を通して新しい視点や自分とは違う解釈を得て、種を見つけ、それを持ち帰って思考し続けるという感覚である。今年度、大学院での対話を通してこれまでの自分の歩みを振り返り、省察する機会に恵まれたことによって、いくつかの自分が大切であると感じていることに気付かされた。語り合うことによって自分とは違う視点での意見や捉えを受け、新たに得たり変容したりした考えを書き表すことを通して自分と向き合うことは、大学院入学時に感じた自分にとっての学びへの「わくわく」につながっていると感じている。

自分が気付かぬうちに陥っていた思考の渦から少し抜け出したような感覚を得られたのは、夏期集中講座が契機であったと思う。夏期集中講座を終えて持ち帰った種をもとに数日間考えて自分なりにまとめたことによって、自分自身として何をすべきかについての意識が明確化してきたと感じる。

昨年度教務主任になってからずっと、自分にできることは何かと模索し続けてきた。今年度はそのもやもやが自分の中で大きくなり、少しずつ輪郭がはっきりしだしたところ夏期集中講座を迎えた。日々の業務や授業から距離を置き、学習する組織や自分自

身の歩み、背景についての思考に没入できる非日常に近い9日間であった。

Cycle 2で『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読み、他業種の事例を通して協働の学習プロセスについて考えたことは、自分が目指す役割に気付く端緒になったと感じる。本校の昨年の様子をたどっているように感じて、その時のことを思い起こしたり、自分自身に引き当てたりしながら読むことができた。実践コミュニティの発展段階を追いながら読み進め、現実のコミュニティの中の自分の存在と、なすべき役割やできることは何かについて考えた。それを受けてCycle 3では、実践の展開プロセスを振り返る中で、自分のこだわりや気になっていること、引っかかっていることは何か、その根幹にあるのは何かを考えるきっかけをもらった。自分の迷いや思考の渦は、そのこだわりや自分が大切だと思っていることがもともになっているのではないかと思いついた。ずっと教務主任としての自分の役割について考え続けていたが、Cycle 3での対話を通して、自分の問いは、「教務主任として」ではなく、「自分が自分として」できることなのではないかと感じた。夏期集中講座を終え、自分が自分自身として目指すのは「人とかわかって、人と人をつなぐ」組織的コミュニケーションの要であることではないかと考えた。それを意識しながら、また日々の業務に没頭していたが、冬期集中講座での対話を通して自分のさらなる課題が明確になった。人に寄り添いながら、様々なことに当事者意識をもって取り組む半面、物事を俯瞰したり、客観的に判断して冷静に対処したりすることが弱いというのが課題である。

自分を省みたり、実践を省察したりする中で見えてきた課題を意識しながら、学び合うコミュニティ

の発展に向けて、自分自身にできることを考え続けていきたい。

## 驚いた自分の変容

学校改革マネジメントコース 1年/越前町立四ヶ浦小学校 山本 幹也

もうすぐ2024年が終わる。長期実践報告の原稿が進まなくて焦っている現在の自分を、1年前は予想もできなかった。1年前、軽い考えで教職大学院に飛び込んだ。異動で担任ではなくなり、時間の余裕ができたので「学びたいな」という気持ちが湧いてきた。そこで、教育研究所や放送大学の通信型の研修を受講してみた。知識は得ることができるが、従来自分たちが受けてきた学び方と変わらないなと感じた。そんな時、教職大学院を知った。自分が大学を卒業する頃、福井大学の大学院ができたばかりだったと思う。友人と一緒に受験しに行き、面接に私服で臨み、叱られた記憶がある。その時の大学院の印象は、専門的な知識と難しい理論を教えられる場所だった。そんなイメージがあったので、講義を聴く通信型の研修とそんなに変わらないのではないかと軽く考えていた。

去年の8月、事前履修として夏の集中講座に出席した。誰も講義してくれないし、座って聞くだけでもなかった。先輩の書いた長期実践報告を読み、4人のグループで意見を交換した。4人ともそれぞれ別の資料を読んでいた。年齢も学校種もバラバラ、こんなグループで話し合いが成立するのかと初めは思った。しかし、実際話してみると、幼稚園の先生は幼稚園の先生の視点から、若手の先生からは若手の考えと自分が思ってもみなかった話が聞けて、時間が経つのが早かった。ファシリテーターの先生はすべての意見を肯定し、的確なアドバイスをしていた。これは楽しいと感じた。今でも名簿を見ると、あの人はあんなことを言っていたなと思い出せる。自分で本を読んだり、講義を聴いたりする以上に心に残っていると感じる。特に、若手のインターンをしている先生が自分の意見をしっかり持っているのには驚いた。教職大学院で鍛えられているのだろうと思う。「個別最適な学びと協働的な学び」と言われるが、その学び方を実践していると実感できた。

4月に正式に入学し、月間カンファレンスに参加した。その日1日はたくさん考え、終わった後は疲労感と満足感でいっぱいだった。誰かが話している時、疑問に思ったことは後で質問ができるようにメモをとった。自分で話す時は、自分の意見をどうすればわかりやすく伝えることができるか考えた。毎回気が抜けなかった。そのように月間カンファレンスをこなすうちに、教職大学院で知った学び方をまねて、実践しようとしている自分がいた。スクールプランから個人の目標を作る校内研修の時、月間カンファレンスのように4人のグループで話し合うようにして、自由に自分の考えを伝えてもらった。職員室には4人座れる机を置き、ちょっとした話し合いに使えるようにした。研究授業では、一人一児童を観察し、検討会で4人のグループになり児童の様子を伝えながら、授業について話し合った。どんな講義を受けたり文献を読んだりするより、自分の経験から得たことの影響は大きいと感じる。今まで、研修は面倒くさいので、できるだけ避けて通りたいと思っていた自分が研修を計画するなんて、教職大学院で学ぶ前までは考えられなかった。逆に、学ばなかったら、今以上に積極性のない、経験だけでしか語れない教員になっていたと思う。

長期実践報告を書いていると、以前勤務していた学校のよいところを、次の学校に取り入れて行事を企画しているのを感じる。新しい視点で話し合い、よりよいものにするのは、教職大学院で様々な視点の考えを取り入れ、自分の考えを作っていくことに似ていると思う。教職大学院では、学校だけでなく、民間の企業の方の意見を聞かせてもらうこともできた。いろんな意見との出会いが教職大学院の魅力の一つだと感じる。

あと数日で正月だが、長期実践報告がまだ10ページ程度しか書けていない自分にとっては、忘れられない正月になりそうな予感がする。

# 長期実践報告に向き合う

## 学校改革マネジメントコース1年履修/坂井市立長畝小学校 川崎 美和

昨年度の事前履修を経て、今年度、福井大学連合教職大学院に入学し、学校改革マネジメントコース1年履修生として学んできました。2年間の学びもまとめの時期になり、今ちょうど長期実践報告に向き合っているところです。

私にとっての長期実践報告を書く意味や、書くことへの思いを述べたいと思います。

この2年間、教職大学院で多くのことを学ばせていただきました。事前履修で、初めて教職大学院の夏期集中講座に参加したときのことをよく覚えています。校種も年齢も違う先生方や院生さんと小グループで、読んだ文献を基に語り聴き合う体験でした。私は、ある先輩先生が残した長期実践報告を読んだ感想を語ったのですが、同じグループのストレートマスターの若い院生の方や、ファシリテーターの教職大学院の先生からの質問が、自分の視点と全く違って驚きました。私は文献の中の著者が行ってきた実践の事実には目を向けていなかったことに気づきました。教職大学院で学ぶ院生さんや先生方は、もっと著者の学びを長い実践の流れの中で捉え、なぜそうだったのか、このときどう考えたのだろうか、その意味付けや価値づけをしながら、自分の経験や実践と結びつけて紐解こうとしていました。そのとき初めて、これが教職大学院の学びなのだ実感しました。これまで自分が受講してきたどんな研修とも違うものでした。立派な講師の先生が大事なことを教えてくれる研修ではありません。自分の実践や読んだ文献についてじっくりと語り聴き合うだけですが、多様な人と語り聴き合う中で、これまで自分では見えていなかったものが見えてくるようになりました。学びがつながり、広がり、深まり、自分の実践を振り返る新しい視点を獲得することができて、再び自分自身を捉え直すことができます。一人ではできなかった学び、まさに協働的な学びです。

私は教職大学院で、じっくり語り合う学びの大切さに気付きました。子どもも教師も主体的で協働的な学び合うコミュニティを築いていくことが大事だ

と思います。主体的に学ぶとは、学び手が目的に向かって興味をもって自分で探究していく営みであり、その目的を達成するためには、多様な仲間と語り聴き合い、深め合う学びが必要です。私はこの学びを教職大学院で経験し、価値を実感し、自校の子どもの学び、教師の学びの中でも実現していきたいと思いました。これまで、自分がとても受け身的な学び手だったこと、そして、自分の授業が教師主導であったことに気づき、反省しました。私の教育観、授業観の転換が一番大きな学びだったと思っています。

私の長期実践のテーマは「子どもと教師の学び合うコミュニティづくり」です。子どもにとっての主体的で協働的な学びとは、また、教師にとって主体的で協働的な学びとは何かということを経験して追求してきました。授業で子どもを見取ることの難しさ、子どもが思考し、表現することをじっくりと待つことの難しさ、自校の研究体制を、実践を基に語り合う場に替えていくためのタイムマネジメントや先生方の理解を得ることの難しさを実感しました。しかし、うまくいかなかったことも、教職大学院のカンファレンスがある度に新たな視点を獲得、振り返ることで、次のステップにつなげていくことができました。

私の長期実践報告は、大成功の道りというものではなく、道半ばで課題を多く残したままのレポートになりそうです。それでも、少しずつでも確実な一歩を残してきた自分の歩みです。2年間を改めて振り返ることで、そのときそのときの自分の思い、教師や子どもの姿に触れ、学んだ理論と重ね合わせたり、これまでカンファレンスで一緒に先生方と語り合ったことを合わせてみたりしながら捉え直し、今の自分の考えを掘り下げてみたいと思います。長期実践報告は、最後にじっくり自分と対話をする時間です。

私の学びの道りはまだまだ続いていき、終わりはありませんが、この長期実践報告が、未来への道になると思います。大切に向き合って書いていこうと思います。



## 冬期集中講座報告

### 学び、振り返り、深める

#### 授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立高志高等学校 笈田 峻汰

このニュースレターを執筆する現在、長期実践研究報告書の執筆もピークを迎えている。昨年度、先輩方がこの時期に苦闘していた姿を見ていた時から、もう1年が経とうとしている。2年間長かったようで短かった教職大学院での学びは、ゴールに向かっていく。

この冬期集中講義は「自分と向き合う」ことに意味を感じている。この報告書を執筆する上で、ほとんどの時間が報告書の執筆に充てられる以上、自分と向き合うのは必然である。私は自分自身と向き合うために何をすべきか考えた。それは「振り返ること」である。そしてこれこそが私の報告書の軸になる。今までなぜ記録を取り続けたのだろうか。カンファレンスの記録を忘れないうちにレポートにまとめたのだろうか。最終的には記録を取った当時の自分と報告書を執筆している今の自分を「振り返る」ことで考え方の変容をつかみ、言語化していくことにつながっている。私の学んだ軌跡を文章として残しておくことで、この先この報告書を読んでもくれた人の経験に重なったり、学ぶ意味をなかなか見いだせない人のヒントになったりするなどその人の学びに繋がってくれれば嬉しい。

過去の記録を振り返り、特に印象的だったものを挙げる。それは長期インターンシップでの授業を見る視点である。インターンシップを始めた当初の私の授業を見る視点は授業者の持つ数学の専門性をどのように生かして授業をおこなうのかという視点に絞って授業を見ることにした。授業を見る上で、この視点はどうしても外せなかった。これは高度な数学の知識や数学の系統性をどのように意識するかということである。高志高校が進学校ということもあり、

当時は「大学入試の難しい問題を解けなければならぬからどのくらい数学ができないといけないのだろう」ということも考えていた。

しかし、この視点はインターンシップを続ける中で、軸はぶれないながらも捉えが変化していったことに記録を改めることで気づいた。「大学入試の数学を解けるように」と思っていたことから「数学の深い理解を持ち合わせた上で授業の設計や展開を考える」と思うようになった。このように変化していったのは授業や生徒の様子をみるようになったからだと思う。新しく何かを学ぶときに最初から難しい問題を扱うわけではない。基礎となる知識を学び、それをもとに発展させていく。発展させていくのは生徒自身の意欲であり、教師はその手助けをするために授業で大学入試の問題を扱う。つまり、スタートは「基礎知識をどう身につけさせるか」と気づいた。もちろん、「大学入試に対応できる力を身につけさせる」ことも重要である。ただ、まずは基礎知識を身につけるための授業の構造や流れを考える、そのために数学の本質を知っておく必要があると考えようになった。これは長期間の授業参観から変化していったことの学びといえる。

多くのことを、記録を取った瞬間に学び、振り返ることでもう一度学び深めることができた。そして報告書を執筆しながら学んでいることを、振り返ることで改めて実感した。

ニュースレターの執筆はこのくらいにしておいて報告書の執筆に戻ろうと思う。この報告書が書き終わったとき、自信をもって「学びを振り返ることができた」と思えるようにしたい。

# 冬期集中講座を終えて

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属特別支援学校

笹本穰太郎

12月25日から3日間、年が明けて1月5日からの3日間、合わせて6日間の冬期集中講座では、大学院での学びや長期インターンの実践記録をまとめるために、ひたすら「書く」と格闘する日々だった。それは同時に「考える」との戦いでもあり、この2年間の特別支援学校でのインターン活動を振り返る中で、自身の軸となる「生徒に寄り添う」という姿勢を改めて見つめ直す時間でもあった。教育に関わる専門職として成長を目指し、自分自身を見つめ直す機会はとても貴重だった。

書くことに行き詰まったとき、助けとなったのは先生方とのグループでの語り合いだった。自分では気づけなかった視点を教えていただくことで新たな発見があり、先生方がこれまで歩んできた実践の道のりを伺う中で、自分の考えがさらに広がっていく感覚を覚えた。意見を交換する中で、新しい視点が加わり、それまで見えていなかった側面が浮かび上がってきた。同じ資料を読んでいても、インターン中の忙しい日々を読んだ時と、今じっくりと振り返りながら読んだ時では、まるで異なる内容のように感じられることもあった。

大学院入学当初のカンファレンスでの「対話」は、学びの場としての価値は理解していたものの、当時は一歩引いた場所から傍聴する姿勢であった。しか

し、この2年間で「対話」を通して自分の視点が少しずつ広がり、大きな枠組みを捉える力が育っていく中で、対話に対する印象が大きく変わっていった。その過程で、常に「生徒に寄り添う」という自身の軸が思考の中心にあり、この姿勢が自分にとって揺るぎない土台であることを再認識した。

「書く」「話す」「考える」を繰り返し、書き進めては戻り、また書いては戻るという一進一退の時間を過ごした。苦しい時間も多かったが、振り返りを重ねる中で少しずつ新しい視点が見えてくる楽しさもあった。特別支援学校での実践の背後にある生徒一人ひとりへの思いや、複雑に絡み合う状況を客観的に見つめることで、共通点や課題が浮かび上がり、今後の方向性が明確になっていった。

この2年間を通じて、「省察する」ことの重要性を改めて実感した。結果や成果だけでなく、その過程を大切にすることを生徒たちに伝えてきたが、同時に自分自身も実績や結果にとらわれていたと気づかされた。長期実践記録をまとめることはゴールではなく、新たなスタートであり、この視点をもとにさらなる実践を積み重ね、省察し続けることが、「生徒に寄り添う」という軸を持ち続けながら歩むために必要だと確信した冬期集中講座だった。

## 人との出会いと対話の大切さを思う

学校改革マネジメントコース2年/横浜市教育委員会教育課程推進室 丹羽 正昇

教職大学院にお世話になって2年め。改めて自分の教職人生を振り返り、長期実践研究報告としてあらゆる機会に恵まれた自分を幸せ者だと思う。私が、長期実践研究報告にあらわしたいことは、人との出会いが人の成長につながり、その成長を促す機能や力が学校にはあり、学校教育のいちばんの使命なのではないかというものだ（これについては後でも述べる）。

私のここまでの教職人生を振り返ると、そこには常に私を導いていた人との出会いがあった。いちばんの出会い、教職人生の師とも呼べる人との出会いであり、今でも私をよりよい教育施策づくりへと誘う原動力の一つにもなっている。

恩師はいつも「学校とは何か」という問いを投げかけてくる。キャリアの浅いうちは、この問いに答えがあるとも思っていなかったし、たとえ答えがあったとしても、教職員の一人として働いていたときには、

それほど考えたことがなかったことでもある。それがいつしか、キャリアを重ねるうちに、学校とは何かということを知りたいなっている自分に気が付いた。

学校教育に携わる中で出会った恩師とも呼べる人は、いまだに大きな存在として私の中にあり続け、現在も元気に後進の育成に関わっている。だからなのか、いつまでも若いように思う。

その恩師は、いつも優しく問いかける。学校とは何か。学校教育とはどうあるものかと。決して直接的ではない問い方で、子どもの学びの在り方や授業づくりについて語りながら、本質的な問いを投げかける。

私は自問自答しながら、自分の言葉で答えようとするのだが、なかなかうまく返しができない。私の感覚では、学校とは何かに対する答えは、おそらく学校について語る人の数だけあると思っている。まあ、これも言い訳ではある。単に整理ができていないだけなのである。恩師も、はなから私に答えなど求めてはいない。私を試しているのでもない。子どもや授業について語り合う中で、それぞれが気付いたことを出し合い、互いの思いや考えを受け取りながら影響されている自分を喜び、常に刷新されていくことへの自覚を促しているだけなのである。

しかし悔しい私は、いくつかの辞書を紐解くという行動に出てしまっていた。すると出てくる定義は、「学校とは、一定の教育目的に従い、教師が児童・生徒・学生に計画的・組織的に教育を施す所、またその施設」もしくは、「学校とは、教育を受けるために設けられた施設や機関であり、教師が生徒に対して計画的かつ組織的に教育を行う場所」というものだった。意外と画一的な定義で驚かされる。多分に施設としての意味合いが強く、教師が児童生徒に教育を行う場所という色合いが濃いという印象を受ける。

学校教育の定義もいくつかの辞書にあたってみた。すると、ほとんどが「学校教育とは、学校において行われる教育の総称」と定義している。面白くもなんともない。そのままではないかと突っ込みたくなる内容だ。今の時代らしく、試しにAIにも聞いてみると、「学校教育は、子供や若者が知識や技能を身につけるための重要なプロセスであり、(中略)学問だけでなく、社会性や協調性を育む場でもあります。友達と一緒に学び、遊び、成長することで、社会に必要なスキルや価値観を身につけることができます」と出してきて。面白いなと思った。私の欲しい定義に近いものを、辞書ではなくAIが導き出している。辞書もAIも人間がつくったものである。違いは、辞書が人間の英知と経験の結晶であり、ある事象や事物について

言葉を吟味して説明しているのに対して、AIは、それ自体が言葉のアルゴリズムをもっている訳ではなく、事例を検索し、その事例を説明している言葉を組み合わせることで、ある問いに対して回答するというプログラミングがされているだけのものである。辞書が多く時間を言葉の吟味や解釈に費やしている一方で、AIは言葉を生み出す以外においても汎用性をもつロボットが表面的・即時的に繕っているのである。それでも、AIにレコメンドされた表現に惹かれてしまうのは、どのような理由からだろうか。

結果だけから導き出されることからすると、学校や学校教育に関しては、人間の意識や思考回路をアップデートしたほうがよいのではないかと考えてしまうかもしれない。今の学校や学校教育、これからの学校や学校教育を考えると、意識や思考をアップデートすることはもちろん必要である。ただし、誤解しないでいただきたいのは、だからといって辞書の定義がだめだと言っているのではない。ましてやAIのほうが、人間の機微を理解しているということでは決してない。小説「舟を編む」で分かるように、辞書を編纂するプロセスが一つの物語になるぐらいである。それへの労力たるや、途方もない時間と人工(にんく)が伴う。それでも、辞書的な意味に賛同できない理由は何か。いくつかある理由の中で、私が思ういちばんは、プロセスが見えないからではないかということである。「舟を編む」の中においても、辞書を編纂するに当たり目立って印象的なのは、対話のシーンである。辞書の編纂のメインは対話だといってもよいと思う。しかしながら、辞書には対話の痕跡がない(正確な表現としては、見えづらくなっているであろうか)。

そうなのである。辞書的な意味が簡素に思えるのは、あらゆる物理的な制約(辞書全体のボリューム、一つの言葉に割けるスペース、説明に用いられる言葉のバランス、編集意図・趣旨等)を受けているからである。どのようなセッションと意思決定の末に表出しているのかが垣間見えない。それこそが、辞書が辞書的な意味として簡素に、時に空虚な表現として受け取られる原因ではないか。私がおのことに気が付いたとき、恩師との対話の意味が見えてきたように思う。

先程、何気なくセッションという言葉を使った。私の中では、セッションとは、人と人が出会い、響き合うことを意味している。学校とは何かという問いに対して、答えは一つではない。他の人と一緒に、そのことを具体的に考えることで、自分の中に答えら

しきものが芽生えてくる。そのとき、自分にとっての異分子が、自分の中に入り込んでくるわけだから、当然のように摩擦が生じる。その摩擦が響きである。響きは空気を伝って相手に届き、それは空気をまとった空間においてのみ生じる。だからこそ人とのリアル空間での出会いには意味がある。

少々、情緒的な表現が先行してしまっただが、私がこのあとあらわそうとすることの根底に流れているのは、人との出会いの重要性であり、そこで生まれる響き合いが人の成長に影響を与えることの証明でもある。そして、それこそが学校のもつ本質的な機能だという論である。

学校とは人と人が出会い、互いに成長していくプロセスを共有する機能を有するものだと、私は考えている。また、学校教育とは、人と人が出会うことで生まれる、意図的・計画的なプログラムとも言える。そこで、本稿においては、私自身の人との出会いと成長をたどることを縦軸に、その時々に出会った人たちや、そこでのエピソードを横軸として展開したい。自身のあゆみについては、私の変容をもたらした出会いのタイミングを節目としてカウントし、全部で5つのパートに分けて示すことにする。置かれている立場や役職、業務上のミッションは、それぞれ異なるが、いずれのパートでも価値ある出会いがあり、互いに響き合い、私の成長の糧となるエピソードが詰まっている。この長期実践研究報告には、たくさんエピソードに触れていきたいと考える。

また、今後の新しい学校教育を支えるものとして、「横浜教育データサイエンス・ラボ」「横浜教育イノ

ベーション・アカデミア」についても取り上げたい。それらはいずれも、大学の研究者、企業、教職員が共創の仕組みの中で協議し、共創するというものである。これらをデザインし、構築するに至った経緯についても、これまでの自分自身の成長の過程が大きく関わっている。子どもを育てる環境は、以前から学校だけではなかったが、今後はより一層多くの大人が共に力を合わせて、子どもを育てていくための仕組み創りこそ大切だとの思いがある。その上で、教職の価値や教職員の経験や勤のすばらしさを明確にしていく必要を思う。その視点においては、子どもの成長についても取り上げたい。子どもの学習に向かう意識を、社会情動的コンピテンシー（非認知能力）を軸にしなが、教職員の関わり的重要性を説きたい。それらについても、私自身の経験からきているのは間違いなく、私がどのように成長してきたのかと深く関係している。

多様な人との出会いが、多くの響きを生み、人が成長する礎となる。それらを実現する学校は、真にすばらしいと思わずにはいられない。そして、人との出会いによって成長してきた人間だからこそ、未来の教育をデザインできると考える。

教職員大学院に入学する前、こんなにいろいろなこと思ったり、客観的に考えたりする人間ではなかったように思う。教職大学院で出会った人とのセッションが私を刺激し、時にはいままでを振り返らせ、時には次代の教育を想起させてきた。冬期集中講座に参加し、改めて人と対話することの大切さと必要を思った。

## 冬期集中講座の振り返り

### ミドルリーダー養成コース1年/福井県立若狭高等学校 小畑 有海

初めての冬期集中講座は本年度に長期実践研究報告をまとめる先生方2名と同じグループになった。ミドルリーダー養成コースに所属しカリタス女子中学高等学校で図書館司書として勤められている高橋先生と、授業研究・教職専門性開発コースに所属し科学技術高校で教えられている松田先生である。お二人とも報告書の執筆が佳境を迎え、まとめの時期ならではの悩みをお話されていた。

特に高橋先生は、自分が書きたいことはコミュニティ形成なのか授業支援なのか、現時点でのまとめ

に一貫性がない気がするといった迷いを打ち明けられていた。来年の今頃には私も同じ気持ちになっているのだろうと思いながら、私だったらどう書くかを考えながら聞いていた。高橋先生から伺ったお話を少し述べさせていただくと、カリタス女子中学高等学校では探究の授業を図書室で行っている。文献調査が容易な環境だが、生徒たちは探したい内容が本にあるのにも関わらず探さきれていない場合が多いのが現状だ。また、探究をやっていてよかった！と思う生徒がごく一部であり、探究がなかなか実らない生徒が多いことも課題としてある。3日間の集中

講座において、グループで話をするたびに、高橋先生が司書としてどのように支援すればよいか、生徒に上手く伴走するにはどうすればよいか非常に悩まれていることがよくわかった。そんな高橋先生に対して教職大学院荒木先生が「長期実践報告書は成功を述べるところではない、失敗もあって良い。省察を書くところだから失敗も書いたら良い」とアドバイスされていた。荒木先生のアドバイスは私にも刺さった。私は昨年の夏期集中講座から自分自身の実践をまとめ始めたところだが、良い報告書になるように良いように書かないといけないというプレッシャーを軽減してくださる言葉だった。失敗も含めて自分の実践とその省察を赤裸々に綴ろうと思えた。また、今回高橋先生と同じグループになったことで図書館司書の先生としての苦悩や葛藤を知ることができた。私自身勤務校で探究を行っているが、図書館を利用することは少ない。そして司書の先生がどんな思いで生徒に接しておられるのか知らない。そこでまずは司書の先生の思いを聞いてみたい。今後司書の先生と一緒に生徒を支援する場面があればビジョンを共有する場面を設け生徒にどうなってほしいかを一

緒に考える時間を大事にしたいと思った。科学技術高校の松田先生とは以前も同じグループになったことがある。その際に職業系学科ならではの教材研究の難しさで意気投合した。冬期集中講座でも同じグループになり共感できることが多いのではないかと思っていたが体調を崩されていてあまり十分にお話できなかったため、またの機会にじっくりと実践を語りたい。

修了された先生方の長期実践報告書を読んだり、これからまとめる先生のお話を聞いたりしていると、先生方のこれまでの歩みが見える。教職大学院に入学してから月間合同カンファレンスと夏期・冬期集中講座を経て、その歩みをまとめる背景には、先生方ご自身の長い実践および省察と教職大学院での語りがあるのだということがよくわかった。2月2日には長期実践研究報告会がある。まさしく今執筆されている先生方の報告が非常に楽しみだ。そして報告会で聴いたことは自分自身の実践と省察に取り入れて、また今後も頑張りたい。

## New Year's Changes

### ミドルリーダー養成コース1年/勝山高等学校 Saeda Ali

My country is warm year-round. Trinidad has 2 seasons – the dry season and the rainy/wet season. When it comes down to the end of the year, there's an ever so slight change in the air – the wind is slightly cooler, and there's a vibrancy thrumming through the atmosphere that hints at the best Christmas in the world. With this time comes amazing food, music, family, and holidays. I felt this change in the air every year. I looked forward to this feeling; I looked forward to the changes that spoke to me of how far I'd come since the beginning of that year. This is the same thrumming I felt in the air during the winter intensive course in December. The feeling of inevitable endings and shiny new beginnings, and being ready for it all.

I sat with the M2 students who were on their final stretch of the programme, listening to their thoughts, their progress on their Long-Term Practice Record, and their advice for my own practice and contemplated on this change. It's incredible to me to realise that I'll be an M2 student this coming fiscal year. I'm such a different educator than I was when I started this programme, and I could really see the change when sitting with the M2 students. There's so much more ease, comfort, and confidence I feel standing in front of the classroom and making decisions about lessons. Rather than feeling hesitant and unmoored like I did when I started this programme, I feel a sense of purpose, drive, and stability. While I'm always learning and discovering new things, I know what I want to achieve and I know what I want to do for my

long-term practice record, and it makes me so excited to begin.

Back when I first started the programme, I didn't really know what to do. What I did know is that I enjoyed teaching and wanted to get better at it. I didn't have any bright or specific ideas about things to do, but I had the motivation. Now, after each round table, each conference, my viewpoint widens a bit more through readings and discussing things with other local and international teachers. This winter intensive course was such a benchmark for me to see just how much I've grown as an educator.

My practice record is based on stories and storytelling. Storytelling is in my blood, my heart, my soul. The process of storytelling and its creation is a passion of mine and I think it's so important to life and education, and I want students to experience that too. I've been creating lessons where students read and give their opinions on stories, find alternative endings, and create their own stories. Why do I think this is so vital for them? Through storytelling, students are encouraged to have original and critical thought – this is something I struggle to encourage in my students. Additionally, language is expression and communication, and I don't want my students to just know about English. I want them to use it for something real, too, like creating their own stories. Through this, I think students can be more motivated towards language learning and even find joy in it. I'm tired of hearing students say "I can't English" because all they're thinking about are their difficult tests. I'm using storytelling to show them a different side to English and awaken their imagination through a foreign language.

Since I've decided on this for my Long-Term Practice Record and started working towards it,

I've felt freer, calmer, and more certain in the classroom. The M2 students gave me such good advice about the classroom that I feel so much more confident now in front of my students. Talking to the international teachers made me think much more deeply about my practice. Often when writing I forget small details that only surface when I'm asked questions, and in the process of explaining I realise how important it is to my journey of teacher development. Sharing practices with international teachers who come from different systems made me see new angles to my practices and really opened my mind to different things I could possibly try in the classroom. It really made me feel like a part of a worldwide education community.

Coming from the realisations and ideas from this winter course, I'm beginning my classes in the new year with the new ideas I got from conversations with others. One class will be making interactive story games, and another will be making a school newspaper. Across all my classes, I'll be implementing new warmups that get students using English before we actually begin the class. I want more speaking communication and thoughtful writings in the classroom, so I'll have free speaking activities at the beginning of the class, and sometimes at the end, I'll have students do small journal entries with things they want to ask about or tell me. I'll also try to talk more about myself, something that I rarely do unless the lesson calls for it. This was another suggestion by an M2 student. This is not something I usually do because I focus so much on conveying the lesson content and on the time restrictions. However, sharing my life genuinely with the students by telling them about my weekend, for example, would help the mood of the classroom and their attitudes towards me. If they know more about my life, and how I view

the world around me, they can feel more comfortable with me. It's such a warm and informal activity and I'm really excited about it.

I feel ready, and most importantly, confident when I think about these things. This confidence means that no matter what happens in my classes

I know I'm equipped to handle it. I'll have great warmups, share my life with my dear students, and show them the world and how to view and express themselves through storytelling. Little by little this year, I'll continue growing into an educator my students can learn comfortably with.

## 長期実践報告の足場づくり

### 学校改革マネジメントコース1年/横浜市立奈良小学校 宮野 雅樹

直前の案内があるまで、冬期集中講座ではどんなことをするのか分かっておらず、夏期のように再び書籍を読んでレポートなどを作成するのかと考えていました。実際には、M2の方と同様に長期実践報告を作成するための準備期間と分かり、M1の院生は、長期実践報告の足場づくりができると思いました。

具体的には、内容の項目やどんな章立てにするか、案を作成することを目標に取り組みました。夏期集中講座のときを思い返すと、自身のこれまでの経験の中で最も印象に残ることの一つである「校内コミュニティ＝メンターチーム」の実践についてまとめたことが記憶に新しく、それを基にしてさらに広げていけないかと考えました。

集中講座の1日目には、これまでの自分の教職経験を初年度から振り返り、項目に分けて見出しを考えてみることにしましたが、書けることや記録として残したいことが実に80項目にもなりました。これを長期実践報告にすべて掲載すると、まさしく自分史のごとく自分の経歴を網羅的に記すことになってしまいます。時系列に示すだけになってしまうのは、避けたいところですが、それぞれの時代にターニングポイントがあり、その時々重要な人との出会いがあることは確かです。その出会いがチャンスを生み、自らの教職人生の新たな局面を迎えるきっかけとなっていることから、人との出会いについても報告書の内容には欠かせない要素となってくると考えました。

グループでのセッションにおいても、M2の方々からは、自身の経験をたくさん書き出すところから始め、それらを単純に事実の羅列にならないように編集していく作業に苦勞していることを聞きました。そのためには、章立てが大切になってくることも考えました。長期実践報告として一つのテーマがあり、

まとまりを作っていくことで、報告書の方向性が定まるのだと学びました。

さらには、この長期実践報告が単純に過去の自分の経験のまとめや省察に終始せず、これから自らの学校づくりに繋がる要素を書き記していくことで、私自身のこれからの管理職としてどのように学校経営に参画していくか、一つの羅針になるのではないかと考えました。

また、読み手は誰を意識して書くのかということが気になったため、セッションの中でその話題も出したところ、本大学の院生の他、広く多くの学生や同じ教職についている方に読まれるということで、読み手は一定の教職に関する知識や理解がある方々であることを意識して書くこととしました。

冬期集中講座の最終日には、クロスセッションを行い、M1の院生同士でこの3日間の取組の成果を報告し合う機会がありました。まとめ方はそれぞれ違うものの、皆さん過去の自分の経験をじっくりと振り返る期間となったことがよく分かりました。

さらに、M1の院生も午後後半に行うM2の方のクロスセッションに任意で参加できるということで、今後の参考とするために参加させていただくことにしました。親しい先輩である方のグループに加わり、3人の方の長期実践報告の途中経過を伺うことができました。書き方については、三者三様ではありましたが、M2の方は内容に重みがあるというか、重ねてきたものの質量が違うと感じました。1年間かけて省察を重ねて構成されたものであることは、章の項立てを拝見すれば分かりました。また、前述の先輩の報告については、同じ横浜市で取り組む立場から内容も非常に理解しやすく、さらにはそれだけではな

い読み手を惹きつける書き方をしていると感じました。

セッションの終了後に先輩と話をしたところ、読み手を意識して、報告書の内容には「ストーリー性」をもたせていることが分かりました。単に自身の経験を羅列したり、現在取り組む業務の紹介をしたり

しているわけではなく、なぜ自分がそのことを考えるようになったのか、過去の経験を踏まえながら展開の工夫をされています。このことは、私が今後の報告書を書き進めるために大きな指針となりました。長期実践報告にストーリー性をもたせるために、自身のこれまでの経験の羅列を記述したものから、どう脱却していこうか、考えていくことにします。

## 「問い」と向き合う

### 学校改革マネジメントコース1年/勝山市教育委員会こども課 木下 恵美

1年目の冬期集中講座はお正月明けの1月5日から7日までの3日間に渡り、1年間の学びを省察した。ただ、実践してきたことだけではなく、「問い」にどのように向き合ってきたのか、自分自身を見つめ直す3日間でもあった。そうは言っても、正直、ただただ書き進めることが辛いと感じていた。そんな中、宮本先生が「1人ではなく、同じグループになった先生方はチームです。共に頑張りましょう」と前向きな言葉をくださり、このグループになったのも何かのご縁だと、グループの先生方に今の思いや悩みも聞いてもらいながら、書き進めた。

「なぜ教職大学院で学ぼうと思ったのか？」真っ先に思ったのは、この「問い」であった。

私は、29年間、公立保育園に勤務していたが2年前に行政に異動になった。ちょうど、公立保育園が閉園になる1年前であった。冬期集中講座は市教育委員会こども課に勤務するようになった頃からの業務について振り返りながら、自分の思いを記した。こども課では幼児教育係に配属になり、幼小連携や保育士の質向上が主な業務内容だった。淡々とこなしているように書いていたが、今思えば、どの業務も戸惑いだらけだった。保育業務しか知らないのだから当たり前なのだが、この年で事務仕事というのは本当に辛かった。さらに、指導体制の充実も求められていたので、「どうしよう」と不安だらけであった。

振り返ってみれば、こども課1年目は激動の1年であったように思う。こんなにも新しいことに向き合ったことは、これまでなかったかもしれない。それでも、たくさんの方と出会い、これまで経験しなかったことを経験し、本当に充実した1年となった。しかし、この1年は多くの学びがあり学ぶことが楽しいと感じることができた半面、何か物足りないと感じていた。そして、教職大学院に入学を決めたのも、

物足りなさを埋めるために何かしなくてはという焦りからだった。

4月から教職大学院で月間カンファレンス、ラウンドテーブル、夏期集中講座に参加し、いろいろな先生方と実践について語り合ってきた。そして、今回の冬期集中講座でのグループでの語り合いの時にも、これまでの思いや苦悩を語った。その中で「先生は今、土台を作られているんですね。」とおっしゃられた先生がいた。何か形として残さなくてはと焦っていたけれど、そうではない。私がすべきことは、勝山市の幼児教育の土台を作り、幼小連携や保育士の質向上に向けての取り組みを発展させていくことなのだ。そのためには、これまで保育者として学んできたことをもとに、新しいことに挑戦し、もっと学びを深め、私自身の学びをブラッシュアップさせる必要がある。だから、教職大学院に入学し学びたいと思ったのだ。助言してくださった先生の言葉から気づくことができた。私の実践は、これまでであった土台に新しい道筋を少しずつ作っていくこと、それは、1歩ずつ進んでいるところだと背中を押してもらえたようにも思えた。

こうして、振り返りながら自分の思いを語り、グループの先生方からの言葉で気づかされた3日間。2日間一緒に過ごした長期実践報告を執筆中の先生方の姿を見ていると、来年にはこんなにもたいへんな思いをしながらか執筆することになるのかと不安にもなった。しかし、こうして実践を書くことで新たな自分に気づくことができるのは、とても楽しみだとも思った。そのためにも記録を残すことは大切だと教えていただいた。ただの記録ではなく、その時の自分の思いや考え、迷い、葛藤も含め心の動きもしっかりと書き留めていくような記録を残していきたいと思った。

最終日には、1年目の先生方とのクロスセッションがあり、校種も立場も違う先生方の実践に耳を傾け、あつという間に時間が過ぎていった。自分の実践を語り、聞き手の先生方の思いを聞く。自分とは違う視点からの話を聞くことで、さらに学びが深まっていくのを感じた。こうして学び合える環境があることが自分を高め、次へのステップへとつながっているように思う。

この3日間、これまでの実践を振り返り、記録するという長い時間を過ごしてきた。「1人ではなく、

同じグループになった先生方はチームです。共に頑張りましょう」まさに宮本先生がおっしゃっていたことが、自分の力の源となっているのを感じた3日間であった。

1年後、自分はどのような成長をしているのだろうか。不安でもあり楽しみでもある。この1年の学びを大事に残りの院生としての1年を大事に過ごしていきたい。そして、これからも「問い」を大事に実践に取り組んでいきたい。

## 冬期集中講座振り返り —これまでの自分ができたことは—

### 学校改革マネジメントコース1年/岐阜市立藍川中学校 伊藤 雄樹

ニュースレター186号で書かせていただいたように、私は「月残業時間45時間以内で取り組める最大限効果的な学校教育サービスの安定供給と仕事の効率化〜効果・効率のリファイン（精製・洗練）を目指して〜」をテーマとして、長期実践報告を作成していきたいと考えています。

そこで私は、本年度までに自分がどのようなことができたのか、今後どのようなことを目指していくのかをここに記したいと思います。

学校現場には、さまざまな年齢層、勤務形態の職員がいます。お互いの状況を理解・尊重しながら、よりよい教育サービスを提供し続けることができる学校づくりを目指すには、何が必要なかを考えました。そこで私が考えたのが、以下の①②③です。この3つの視点で自分が行ったことをお伝えします。

#### ① 手軽で時間がかからず、効果が高いこと

令和3・4年度に、岐阜県小中学校教育研究会 中学校国語科研究部会（以下 中国研）の主務者を務めました。その際に取り組んだのは、ホームページで手軽に優れた指導案を見たり、自由にダウンロードしたりすることができるインフラを整備しました。そのことで、勤務校での勤務を行いながら、出張で行き来の時間もなく、手軽に研修ができ、自身の授業力を高めることができました。

<https://gifukokugo.com>

（↑中国研ホームページ内「◆授業資料」参照）

#### ② 無駄が少なく、教員間で差が少ないこと

現在どの学校でも、不登校児童生徒が増えていきます。本人も保護者も、学校で授業を受け、学力を高めたいと願っても、それが難しいケースもあります。

そこで、私たちは、文部科学省から出ている「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策COCOLOプラン」を、藍川中学校の9教科で当てはめると、どのような支援ができ、どのように成績に結びつけることができるかを明らかにした、「藍川中学校版COCOLOプラン」を作成しました。

こうすることで、担任が本人・保護者の希望を受けて、9教科の教科担任のもとに聞きに回る時間を削減し、「あの先生は」といった教員間の差を減らし、より効果的な教育サービスを安定して供給できる仕組みづくりを目指しました。

#### ③ 必要なことをできる時間を生み出すこと

学校は多忙です。教材研究・授業・部活動の指導など、すべきことは山積みです。また、時代の流れと共に、新しいアプリの操作を覚えることも必要になります。こういった研修の時間は、どうしたら生み出すことができるかを考えました。そこで、生み出したのは、「3年生の部活動引退後の、6時間目1・2年生部活、3年生授業」という方法です。

3年生は1・2年生より早く卒業する関係で、授業時数を確保したい。1・2年生は逆に授業時数が多くなります。

そのため、6時間目を1・2年生は部活、3年生は授業とすることで、授業時間数を調整することがで

きます。また、本来6時間目の後に行う部活を6時間目に行うことで、下校時間が1時間程度早まります。その時間を、研修や教材研究に充てることのできるような環境づくりをしました。

このような取組を行ったこれまでの実践を振り返るとともに、来年度は、「本当に勤務時間は短くなったのか」「生徒・保護者は、教育サービスのよさを実感しているのか」を検証できる方法を探っていきたいと思っています。

## 教育総合研究所より

### 研究所の明日を拓く

～全教連での歩みをつなぐ～

教育総合研究所 教科研究センター 新教育課題研究課 課長

客員准教授 渡邊 淳子

令和6年10月24・25日。「R6年度 全国教育研究所連盟研究協議会 福井大会」が開催された（※以後、全教連と表記。）これは、各都道府県市町村等の教育研究所や研修センターなどが所属する168団体で構成される連盟である。全教連は、各県が持ち回りで担当し、年に1回開催されている。昭和37年から実施されているが、全教連を本県で開催するのは初めてのことであった。本大会においては、教職大学院研究科長である木村優教授による基調講演も行われ、福井県と教職大学院の協働連携の強みの中で、本県の教育が根強く進められていく様子を全国にアピールする貴重な機会ともなった。また、独立行政法人教職員機構(NITS)による情報提供や参加者の情報交換会、クロスセッション等、一連の工夫を凝らしたストーリーの中に大会テーマについての参加者の確かな対話を組み込んだ。故に、福井県教育総合研究所にとっては、全国に、研修観の転換に向けた当研究所の熱い思いを発信できたエポックメイキングの日になったというわけである。

「明日を拓く 探究 創造 実践」は、当研究所の指標いわゆるビジョンとして長年かかげられているものである。今なお、古びもせず、煌々と私たちを照らし出している。私たち所員はその照らし出された光のもと、これまで歩んできたと言える。しかし、激しい時代の変化の中で、「明日を拓く」ためには、私たちは、これまでとは違った歩み方をせざるを得ない事態にも遭遇している。時代の変革と共に新たに積み重なる現代の今日的課題に根ざした教育的諸課題に立ち向かうためには、私たち研究所は変わり続

けなければならない。そこで、全教連研究協議会福井大会のテーマを「新たな教師の学びを支える教育研究所のイノベーション ～自律的に学び学校現場と共に高め合う研究所～」とし、この2年間に渡り、考え続けてきた。

これまで当研究所は、「知見を提供する研究所」「研修を提供する研究所」として存在してきた。しかし、この全教連を機に、私たちは研究所のこれまでと向き合わなければならなかった。向き合わなければならぬのは自分たち自身の有り様であったとも言える。研修受講者のためだけの存在ではなく、学校現場を支え、「新たな教師の学びを支える研究所」であるためには、まず私たちが自律的な学ぶ存在である必要があるということから始まる。そこで初めて、学校と共に学び合う同僚として存在でき、「新たな教師の学びを支える研究所」の姿が実現できる。これまでの研究所の当たり前を問い直し、定義し直すという発想により、「自律的に学び 学校現場と共に高め合う研究所」という新たな軸を据え、改革や研究を進めたのである。

当研究所の中で当課は、所全体の学びをコーディネートするという役割を担っている。当研究所には、全所員を対象にした、①GROWTH(所内研修会)と教職大学院との連携の中で学び合う②Develop(協働研究会)の2つの学びの場がかねてよりあった。この2つの学びの場の企画・運営が当課の業務であり、これまで何回もそのデザインに試行錯誤が重ねられてきた。(その一例として、所員の探究型の研修や研究所版ラウンドテーブルの実践など)その土台に、今年度は、

「所員の研究」が強く位置付けられ、探究や研究が行われてもいる。いずれにしても、在職期間が数年という短い異動スパンの中で、どうやって自身の業務を改善しつつ、自分の教師としての力量向上も図れるのかは、難しい課題であり続けると言える。



所員はいずれこの研究所で得た知見やAgencyを携えて、学校現場でもまた学び続け、挑戦し続ける存在となっていくことは悲願でもある。当課は、所員が自律的に学び続ける教師であり、また優れた研修提供者であるためのモチベーションを高め続けるためにはどうしたらよいかに悩み、対話を重ねていた。これが、全教連のテーマの根底を流れる思いへと連なっていた。

いかにして、自律的に学ぶのかという大きな問いは、即ち当課の取り組んでいる「校内研修コンサルテーション事業」（校内研修を活性化したいという学校の希望を受けて当課が共に参画する）の本質ともリンクする。そこで、本取組が、この新たな軸である「自律的に学び学校現場と共に高め合う研究所」という固く結ばれた問いの結び目をほどく手がかりとなったプロセスを全教連で提案するに至った。本取組には、様々な課題ももちろんあるが、本取組によって、いくつかの気付きを拾い集めることができたからである。これらは別に新しい発見でもなんでもない。

1つ目は、「アウトカム」の創出である。それは、私たち行政が陥りがちな表面的な評価や頑張った感、単純な数値目標の達成のみではかされるものではなく、見えにくい広がりとも言えるものである。私たちは、見えやすい評価に踊らされやすいが、自分たちの行った研修や取組が、学校現場の別の文脈で展開されていくことこそが、実質的な「アウトカム」なのである。そして、私たちがそれらの「アウトカム」からさらなる新たな価値を探し続けることが、「自律的に学び学校現場と共に高め合う研究所」のアンカーとな

ることに気付いたことである。容易く気付く変化だけではなく、その背景にある真の要因や問題、プロセスを丁寧に見取ることがまず大事だという気付きを得た。

2つ目は、学校現場との協働探究関係の構築である。実践による成果と課題を次のレイヤーに上げていくために、あらゆる「囚われ」を取り払う、より精度の高い省察が学校現場や研修現場での学びを紡いでいくプロセスの中で生まれることが重要だということである。その省察のプロセスを再び、GROWTH・Developの2つの学びの場で、語り合い、さらに高めていくことが出来た。当面している当事者が気付かなかった盲点や新たに意味づけされた価値に気付くことで、新たな一歩を踏み出すことができたということである。そうした現場での実践と研究所の省察との往還は、変化をおそれずに挑戦していくことの価値を見つけ続けるイノベーションへの序章であり、そこには、「わくわく」に溢れ、温かな同僚関係の構築が自然なままにあることが前提にあってはじめて、より確かになっていくものである。学校現場との同僚関係、研究所内の同僚関係の両方である。

研究所は、現場と共に伴走できなくても、せめて併走しなければならない。併走しつつ、現場の課題にフォーカスし、協働関係を築き続ける必要がある。より近く、より希望に満ちた協働関係である。これまでの「知見を提供する研究所」「研修を提供する研究所」のたたずまいと共に、「自律的に学び学校現場と共に高め合う研究所」という軸をもち、学校現場の様子をより近く見取り、的確に変化に対応できるだけの力を備えるために、忘れてはならないことだったとも言えるだろう。

全教連は、いろいろな意味でエポックメイキングの日になったと同時に、あくまで明日に続いていくプロセスの1地点でもあった。こうして全教連を経たプロセスは、静かに過去になると同時にここからどう動き出すかの未来を照らし出すものだった。新たな教師の学びを支える研究所の姿は、所員が、「そうになりたい」と思ったときに実現する。そう思える場を具現化していくのが、当課の役割であり、今後も、所員が育ち合う場作りや研究のデザインを所全体で考え、挑戦し続けていくことで、「明日を拓いて」いきたいと考えている。

# 実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Spring Sessions 開催！

2月22日、23日に、実践研究福井ラウンドテーブルが開催されます。  
詳しくは、HPをご覧ください。<https://www.fu-edu.net/story/2429>

参加の申し込みは、HP内申し込みフォームか、以下のURLからお願いします。

申し込みURL <https://forms.gle/a57jaRwRx2VMcL1h6>

また、2月22日にはポスターセッションも行われます。

ポスターセッションでの発表を希望される方は、以下のURLに示す案内を確認し回答をお願いいたします。

[https://ufdeli.cii.u-fukui.ac.jp/public/eC5TQFZMKNSEtShfc75viK3MC\\_ZzhRyn\\_cFqoxP416FY](https://ufdeli.cii.u-fukui.ac.jp/public/eC5TQFZMKNSEtShfc75viK3MC_ZzhRyn_cFqoxP416FY)

以降のページに特別フォーラム、各 Zone の概要を掲載します。

# 実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:  
Spring Sessions 2025  
for Reflective Practice  
and Organizational Learning  
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究  
福井ラウンドテーブル  
2025 Spring sessions  
The 25th anniversary year of Round Table  
Cross Sessions

2/22 (sat) 8:40-17:40 (zoom 接続開始 8:10)

Session I 教職大学院改革特別フォーラム 8:40-11:00

新聞が結びひらく新たな学びへの企図 Zoom  
教育改革の広範な展開を支えるメディアの役割を探る

Poster Session I ポスターセッション 11:20-12:20-大学生・社会人(対面/Zoom 接続開始 11:00)

Poster Session II ポスターセッション 13:10-14:10 -児童・生徒-(対面/Zoom 接続開始 12:50)

Session II

学校・教育・地域を考える 6つのアプローチ 14:30-17:40

- A 学校:子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ-主体的な学びのプロセスを問い直す- 対面/Zoom
- B 教師教育:教師であることを支える教師教育-信濃教育会と福井大学教職大学院の歩みから- Zoom
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする Zoom  
-いつもの居場所を離れてみることから開ける可能性-
- D International:International Initiatives on Collaborative Learning Zoom  
-Teacher Education and Professional Development-
- E 探究:学びと教えのあたらしいすがたが好みをみんなで考える 対面/Zoom  
-誰もか「居心地」の良い学校はつくれるか?-
- F インクルーシブ:「個」の視点から教育を再考する-育ち合う子どもたちとコミュニティ- 対面 (AOSSA 会編)

2/23 (sun) 8:20-14:00

Session III Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:20-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40 ④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり語り、その省察をふまえて実践を振り返っていく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての方を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝えたい、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聞き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語りていきたいと思っています。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ですべてが気づいたこと。いま改めて語り直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面に共有し成長のプロセスを探っていきたく思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く育まれていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 参加申し込みが必要です。ホームページの申し込みフォームからお願いいたします。
- 次のURLからも申し込み可能です。<https://forms.gle/a57jaRwRx2VMcL1h6>
- 2/23のsession IIIの実践報告者を募集しています。申し込みフォームで選択ください。
- 2/23のsession IIIの参加についてのお断り(午前後半全日程(8:20-14:00)の参加をお願いします。ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聞き合い、考え合うことを目的としています。そのため8:20-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として8:20-14:00の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお断りいたします。プログラムの変更等があります。最新情報を教職大学院ホームページ<http://www.fu-edu.net/>をご確認ください。

実践研究福井ラウンドテーブル spring sessions 2025.2.22-23

by FK 2025.1.11

実践研究 福井ラウンドテーブル

2025 Spring sessions

22(sat) 8:40-17:40  
23(sun) 8:20-14:00  
福井大学教育学部附属義務教育学校  
online-offline hybrid sessions with Zoom

探究する学びを実現する教師  
教師の実践力を培う学校拠点  
教師を支える教職大学院の実践研究

学校と大学/  
実践と研究を結ぶ  
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2025.2.22-23

福井大学連合教職大学院・総合教職開発本部  
福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究所  
後援 福井県教育委員会

online-offline hybrid sessions with Zoom

2025年1月31日更新

実践研究福井ラウンドテーブル2025 Spring Sessions

Keynote Session 教職大学院改革特別フォーラム

2025年2月22日(土) 8:40-11:00  
オンライン (Zoom 使用)

「新たな教師の学び」を支える協働のためにⅦ

## 新たな学びへの多様な企図を支える

教育改革の広範な展開を支える行政・メディア・大学の役割とその協働の可能性を探る

探究する学びへの実践と展望をより広く共有するために  
行政・メディア・大学が果たす新たな役割とその協働の可能性を探ります。

転換を続けるグローバル化した社会の中、所与の知識の伝達・習得を中心とした学習から、流動状況の中で探究・省察し協働実践する力を培う学習への大きな転換が求められ、さまざまな学校・地域において、新たな学びへの挑戦が始まっています。

しかし、そうした先駆的な企図を結び、より多くの、そして大多数の人々と共有し、広範な支持のもとに実現していくための取り組みはまだ始まったばかりです。今回のフォーラムでは、新たな学びへの企図を支える福井県・福井新聞・教育新聞・福井大学の取り組みを共有しつつ、それぞれの取り組みを結び、より広い支援のための協働の可能性を探りたいと思います。

福井県では、学校における「子どもたちの主体的で協働的な学び」・「探究学習」を支え、「子どもが主役」の教育を実現するための施策を積み重ね、今後に向けてさらに発展させていくアクションプランを策定しつつあります。

福井新聞では2022年春より、福井の学校で進められている新たな学びへの多様な挑戦を追い、毎週日曜日付で見開き2面を学校教育面として掲載しています。県内の小中学校・高校・幼稚園・特別支援学校、そして大学と広範囲にわたり、学校の変革への試みや実践事例、子どもたちの学びの内容を広範な読者と共有する、開かれた学びのひろばとなっています。

教育新聞は、教育の専門紙として「教育ジャーナリズム」を掲げ、教育改革をめぐる政策や取り組み、世界の教育の動きを広く探り、教育に関わる読者と共有する役割を長年にわたって担ってきています。「教育を変えるファクトがある」「教育現場と社会つなぐ国内最大級の教育ニュースメディア」「対話と共感が生まれる瞬間」。そのメッセージには、教育改革のための開かれた共有の場を開こうとする、この新聞の姿勢が示されています。

福井大学教職大学院・総合教職開発本部は、教員養成フラッグシップ大学として、学校・教育委員会・教職員支援機構と結びつつ、探究する学びの実現とそれを支える教師の実践的な力量形成のためのカリキュラム開発を進めるとともに、その広範な展開を支えるネットワークづくりという課題に取り組んでいます。

新たな学びの多様な企図を結び支えるそれぞれの取り組みと蓄積に耳を傾けながら、今後、より広い支援のフレームを協働して創っていくための取り組み、その課題を見定めていきたいと思っています。

登壇者(予定)

福井県教育長 藤丸 伸和

福井新聞 局長待遇 みんなの新聞推進室長 菊野 昭彦

教育新聞 編集長 小木曾 浩介

福井大学大学院連合教職開発研究科長・教授 木村 優

文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 教員免許・研修企画室長 石川 仙太郎

他

## Zone A テーマ：子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ

### ～主体的な学びのプロセスを問い直す～

Zone Aでは「子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ」をテーマとして掲げ、子どもの学びのプロセスを大切にしながら、子どもたちの遊びや生活、学習、そして大人たちが学び合っていく活動を展開していくことについて考えてきました。「主体的・対話的で深い学び」と同時に「チーム学校」「こどもまんなか社会」「co-agency」といったことが提起されてきたように、今、子どもたちが主体的に学びを深めていくために、学校や園、そして、地域で支えていくことが求められています。

前回のシンポジウムでは、保育者が子どもたちの遊びの展開を丁寧に見とりながら遊びの環境を工夫し、子どもたちと共に遊びを深めていく保育者の姿に学びました。また、中学校の教師が、子どもと共に授業研究会等で語り合う中で新たな気づきや問いにふれ、学習活動を再構成していく教師の姿に学びました。

私たちは、常に子どもに学びながら実践を変えていこうとする教師の姿勢に注目してきましたが、あらためて、「子ども主体」という時、「教師はどこに立っている」といえるのでしょうか。「教師主導」でなく、また子どもの「後追い」でもない教師の立ち位置、授業とは、どのようなものなのでしょうか。また、子どもの主体的な学習は、教科学習において、どのように実現可能なのでしょうか。評価との兼ね合いの中で、悩みながらこれらの問いに向き合っている方も多いのではないかと思います。

今回のシンポジウムでは、小学校の実践から、教師が単元当初に意図や計画を持ちながら、子どもたちの学びの様子からそれらを変容させ、子どもたちと共に授業を展開してきたプロセスを報告していただきます。また、高校の実践から、教科学習において、評価も意識しながら、どのように子ども主体の学びを実現しようとしているのか、そのプロセスを報告していただきます。「主体的な学び」のプロセスを、参加者の皆様と一緒に探っていきたいと思います。

#### ☆ハイブリッド開催

Connection	14:30-14:40	オンライン接続
Orientation	14:40-14:50	オリエンテーション

#### 【Session I】

Symposium 「子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ」  
～主体的な学びのプロセスを問いなおす～

#### <シンポジウム>

14:50-15:10	富山県富山市立堀川小学校	教諭	大津賀悟史
15:10-15:30	福井県立若狭高等学校	教諭	横田和也
コーディネーター：福井大学教職大学院		香山太輝	

#### <全体> 15:30-16:00

私たちは、「主体的な学び」を子どもとの相互作用を通してどのように組織していくことができるのか、話題提供をふまえて皆様と共に探っていきます。

#### <休憩> 16:00-16:20

#### 【Session II】 16:20-17:40 Cross-session

Session Iの議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。校種等をクロスした小グループ形式での対話を編み込み、実践をデザインし、展望を生み出します。

## Zone B 教師教育

### 教師であることを支える教師教育

～ 信濃教育会と福井大学連合教職大学院の歩みから ～

教師の長時間労働と多忙化が世界的な社会問題となり、「well-being」への関心が高まっています。日本においては、労働環境の厳しさが浮き彫りとなり、教員志望者が減少しています。

このような厳しい状況下にある学校現場では、それぞれの地域的特性や経験を活かしつつ、「令和の日本型学校教育」を実現するという課題と、これまでの公教育の質を維持するという課題に、同時に取り組んでいます。さまざまな試みが展開する中で、合流点の一つは、学校、地域、大学、自治体をつないだ広いコミュニティの重奏の中で、「教師であること」を支えることにあります。

教師であるとはどういうことなのか。この問いに対して、1886年（明治19年）7月に設立された信濃教育会は、長い年月の中でふるいにかけて、磨きあげられてきた教師たちの経験や実践を土台とした独自の教師像を示し続けています。

Zone B「教師教育」では、信濃教育会との対話を通じて、教師であることを支える自律的かつ専門的な教師教育のあり方について問い直してみたいと思います。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

【会場】 福井大学教育学部附属義務教育学校・プロジェクトルーム棟（ゆずりは）より中継

#### 【登壇者】

大日方 貞一 氏（公益社団法人 信濃教育会・会長）

松木 健一 氏（福井大学・理事/副学長）

西村 拓生 氏（立命館大学文学部・教授）

14:00-14:30 オンライン接続

14:30-14:35 趣旨説明 鮫島京一（福井大学教職大学院・教授）

14:35-15:05 報告1 大日方貞一氏 「信濃教育会における教師教育——信州の教師となるとは？」

15:05-15:35 報告2 松木健一氏 「連合教職大学院における教師教育——二つのパラダイムを超えて」

15:35-15:40 休憩

15:40-16:10 Session1 二つの報告をめぐるグループ対話

16:10-16:25 Session1 をめぐるグループ対話の共有および登壇者への質問

16:25-16:30 休憩

16:30-16:50 Session2 参加者から出されたことをめぐる対話 西村拓生氏（司会）・大日方貞一氏・松木健一氏

16:50-17:25 Session2 における対話を各自が置かれている文脈と照らし合わせながらのグループ対話

17:25-17:40 ふりかえりと展望

## ZoneC コミュニティ

### 持続可能なコミュニティをコーディネートする いつもの居場所を離れてみることから開ける可能性

私たちが学び成長する時、多くの場合、自分とは違う個性を持った他者との出会いがあります。これは ZoneC の歩みの中で繰り返し発見されてきたことです。若者や移住者が地域住民と出会う時、小学生が地域の伝統に触れる時、地元の経営者が中学生と対話する時、そこにはいつもお互いに学び成長する場が生まれていました。このような出会いは、いつもの自分の居場所から離れる時に生まれるように見えます。今回の ZoneC では、私たちがいつものコミュニティを離れて、一時的に違うコミュニティに参加することで開ける豊かな可能性について考えていきます。

スポットを当てるのは、「足羽川ふれあいマラソン」という地域社会で長く親しまれているイベントです。この大会は社会福祉法人足羽福祉会によって主催されており、その運営は多くのボランティアによって支えられています。ボランティアには地元住民だけでなく、小学生も中学生も高校生も大学生も PTA も会社員も行政職員も障がいのある人もない人も、多様な人が集い、思いを共有し、協力しあって、ふれあいとおもてなしに満ちた大会を実現しています。広くわかち合われた大会への思いは、スタッフの皆さんの明るい挨拶、沿道の声援や吹奏楽部の演奏、ゴール後の美味しいぜんざい、荷物預け所のスムーズな運営など、随所に感じられます。

注目したいのは、いつもの日常を離れて集った多様な人たちが、どのようにして見事な成果を生み出すようになったのか、その過程で個人とコミュニティにどんな変化が生まれてきたのか、という点です。なぜなら、ここでは誰もがいつもの日常を離れており、だからこそ生まれてくる互いの支えあいや活かしあいがあり、それが成果につながっているように見えるからです。いつもの慣れた学校や職場や近所というつながりを離れて、未知の人たちと協力して何かを成し遂げようとする時、私たちの内面と間で何が生まれるのでしょうか。それはいつもの居場所に戻った時、どんな変化を生むのでしょうか。

いつもと違うコミュニティに参加し、いつもと違う人たちと協働する時に生まれる可能性を考えることは、現在あらゆるコミュニティが抱えている持続の困難さ、あるいはマンネリ化に対する新しい視界を開いてくれると考えています。私たちはいつもと違うコミュニティでいつもと違う学びを得て、それがいつものコミュニティに環流する時、人の成長とコミュニティの進化が好循環を始めるのではないかと。そんな可能性に向けた対話の時を紡ぎ出せればと思います。それは多様な背景を持つ私たちが集う ZoneC が持つ可能性の再発見にもつながるはずです。

14:30～14:40 趣旨説明 富永 良史

14:40～15:00 実践報告「足羽川ふれあいマラソン」(仮)

高村 昌裕さん (社会福祉法人足羽福祉会)

15:00～15:20 大会運営を支えるボランティアのみなさんとの対談

コーディネーター：清川 卓二

15:20～16:00 小グループでの話し合い

16:00～16:15 休憩 (チャットタイム)

16:15～16:45 全体共有

16:45～17:15 小グループでの話し合い

17:15～17:40 全体共有と全体セッション～ふり返りと展望～

全体ファシリテーター：富永 良史

Saturday, February 22nd 15:00 – 17:20 (Japan Time)

# International Initiatives on Collaborative Learning

## Teacher Education and Professional Development



Hosted by The University Of Fukui, Japan

The Fukui Roundtable is held semi-annually in February and June. The Roundtable consists of five zones (A, B, C, D, E). Zone D International provides a platform for collaborative learning on practices and future prospects for teacher education reform inside and outside Japan.

The University of Fukui has been accepting a large number of foreign students who are engaged in teacher education through collaborative learning and has been maintaining its ties with the past foreign students by inviting them to the Roundtable to share their previous and current practices with practitioners from different countries. Moreover, since 2021, as part of its global development, the University of Fukui has been focusing on the Nalikule College of Education and its demonstration school in the Republic of Malawi and following the process of their reflective lesson study.

This Zone will consist of two sessions; Symposium and "Roundtable." In the symposium, the symposiasts will discuss the proposed approaches, results, and challenges in their contexts. In the "Roundtable," educators from various countries will share their practice and learn from each other in small group discussions. We hope that these examples will encourage you to reflect upon your own practices. These sessions will also be translated into Japanese.

Zone D では、実践における協働的な学びのプラットフォームを提供し、国内外の教員養成の展望を拓くことを目的とし、世界各国の教育関係者と実践や学びを共有し、捉え直しを行っています。福井大学教職大学院では、世界各国からの留学生を受け入れています。福井ラウンドテーブルでは、探究型学習を通じた教師教育を受けた留学生が帰国後の授業実践の報告も行っています。加えて、2021年からは、福井大学が行っているマラウイ共和国のナリクレ教員養成大学及び附属高校と協働・連携し、子ども中心の授業や協働探究学習について語り合ってきました。今回も引き続き、世界各国の様々な実践を聴き合う中でより良い子どもたちの学びについて探ります。この Zone においてはシンポジウムでの事例紹介とラウンドテーブルでの議論を通して、参加者自身の実践と省察が深まることが期待されます。なお、本セッションは英語での議論となりますが、**日-英の通訳を行います**ので、ご希望の方は、申し込みの際に通訳希望としていただき、当日は通訳用の Zoom に接続するためのデバイスを**別途**ご用意ください。



### Lesson Study Network in Nalikule College of Education and Malikha Community Day Secondary School, Malawi

< Symposiast >  
Jeremiah Kampazangula Phiri  
Lecturer,  
Nalikule College of Education, Malawi

< Symposiast >  
Joseph Eliyas Mbale  
Teacher, Malikha Community Day  
Secondary School, Malawi



[ Session I ] 15:00-15:40 Symposium  
<Moderator> William Tjipto, University of Fukui <Commenter> NUMAJIRI, Takuya, University of Fukui

[ Session II ] 16:00-17:00 Roundtable  
Sharing and learning from each other's practices in small groups. We are welcoming the following guest speakers to present their experiences:

Doaa Hashem (Egypt) Egypt-Japan School Obour	Mala Manurung (Indonesia) Gloria Christian ES 1, Surabaya	Alwalea Noman (Egypt) Egypt-Japan School Suez
Kandy Perez (Guatemala) Don Bosco Salesian School of Guatemala	Jose Luis Contreras Silva (Mexico) Technical SS #161, School Zone 01, Morelia	Shana Wolff (USA) Fukui University of Technology, Japan

[ Closing ] 17:10-17:20 HASHIMOTO, Hisayo, University of Fukui (TBD)



[ Register Online at the QR Code or URL ]  
<https://forms.gle/9hf2K11cngsYTBEC8>  
(Registration closes on Monday, February 17<sup>th</sup>)

[The United Professional Graduate School of Professional Development of Teachers, University of Fukui ]  
<https://www.fu-edu.net/en/>

[ Contact ] William Tjipto, wtjipto@u-fukui.ac.jp

# 2025.2.22 SAT 11:20-17:40 学びと教えのあたらしいすがたカタチを みんなで考える

対面会場 福井大学教育学部附属義務教育学校  
<https://maps.app.goo.gl/U1L6BLmSunWenN896>

オンライン Zoom

参加申込 本フライヤー二次元バーコードから  
参加・発表申込フォームに  
お進みください

## スケジュール

11:20-12:20 ポスターセッションⅠ（主に大学生・社会人）

13:10-14:10 ポスターセッションⅡ（主に児童・生徒）

※ご発表いただいた方には、福井大学大学院発行の  
「発表証明書」を贈呈いたします。

14:30-17:40 ワークショップ

誰もが「居心地」の良い学校はつくれるか？

参加申込



<https://forms.gle/a57jaRwRx2VMcL1h6>

ポスターセッション発表申込



<https://forms.gle/v5rDvkNAvcvBcvLRA>

ZONE E  
探究

「個」の視点から教育を再考する  
 ー育ち合う子どもたちとコミュニティー

共生社会の実現、多文化共生、ダイバーシティの推進など、多様性が尊重される社会の実現は、我が国における一つの大きな課題となっています。多様性の尊重はマイノリティや社会的弱者といった一部の人々に関する問題としてクローズアップされがちですが、そもそも、私たちはみなそれぞれがユニークな存在であり、多様性を彩る一員です。つまり、多様性が尊重される社会とは、全ての人があるがままに生きることが大切にされる社会に他なりません。そうした意味でのインクルーシブな社会の実現には、全ての子どもがあるがままの存在として生き、育つことのできる教育の取り組みが不可欠です。この困難な課題に立ち向かうため、実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Spring Sessionsにおいて

「ZoneF インクルーシブ教育」は立ち上がりました。そして、実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Summer Sessions 以降は、『ZoneA 学校』とのコラボレーションによって、多様な背景や困り感を持つ子どもも含めたすべての子どもが、あるがままの存在として生き、育つことのできる学校教育の在り方を探究してきました。その中で、一人ひとりの子どもに寄り添うこと、子どもの視点から学校の当たり前を問い直すことの重要性を再確認してきました。

多くの子ども達が共に学ぶ学校の中で、一人ひとりの子どもの思いを深く共有するのは容易なことではありません。しかし、一人ひとりの子どもに寄り添うためには、そして子どもの視点から学校や社会の当たり前を問い直すためには、一人ひとりの子どもの世界を知ろうとするまなざしを持つことが不可欠です。そこで、前回の実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Spring Sessions では、ZoneFとして「『個』の視点から教育を再考するー子どもと教師の接面を探るー」というテーマを掲げ、シンポジウム・フォーラムを開催しました。シンポジウムでは2名の方に話題提供をお願いし、それぞれの場で生きる個別具体的な子どもの姿を共有することを通じて、子どもの視点から学校や教育のあり方を探ってきました。いずれの話題提供においても、子どもが自己を位置づけることのできるコミュニティの存在の重要性が示され、個に寄り添うことと、個とコミュニティとの関係を編むことの両輪から教育のあり方を考える必要性が浮かび上がってきました。

しかし、個に寄り添うことと集団へのアプローチは時として両立困難な事態として私たちの前に立ち現われます。そこで今回の実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Spring Sessions では、個別具体的な事例の共有を通じて、個に寄り添うことと子どもが生きるコミュニティとの関係を編むことを問い直し、個とコミュニティの相互の育ちが実現するようなインクルーシブ時代の教育のあり方について参加者のみなさまと共に探究していきたいと思ひます。

日時：2月22日（土）13：30-17：00

会場：AOSSA（福井県福井市手寄1丁目4-1）福井市地域交流プラザ 6F 研修室

13:30-13:40 〈Session 0〉オリエンテーション

13:50-15:15 〈Session I〉シンポジウム

話題提供	豊中市立南桜塚小学校	教諭	中田 崇彦 氏
話題提供	福井大学教育学部附属特別支援学校	教諭	岩佐 成樹 氏
コーディネーター	福井大学連合教職大学院		廣澤 愛子

15:35-16:55 〈Session II〉クロスセッション

話題提供を踏まえ、小グループ形式で語り合います。個に寄り添うことと子どもが生きるコミュニティとの関係を編むことの両輪から、それぞれの実践者が直面している課題や取り組みの中で見えてきたことを捉え直し、明日への展望をひらいていきたいと思ひます。

## Schedule

<b>2/8 Sat.</b>	第一回入試
<b>2/22,23 Sat., Sun.</b>	実践研究福井ラウンドテーブル
<b>3/1 Sat.</b>	第二回入試
<b>3/13 Thu.</b>	運営協議会(オンライン)
<b>3/24 Mon.</b>	学位記授与式 学位記伝達式 <b>18:00 - 20:00</b>

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。  
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。  
関心がある方は、[dpdtfukui\\_n1@yahoo.co.jp](mailto:dpdtfukui_n1@yahoo.co.jp) までご連絡ください。

【編集後記】今月は長期実践報告会やラウンドテーブルなど大きな振り返りの機会があります。この190号の記事からも、皆様がそれぞれの思いで自分の学びを振り返っておられる様子がよく伝わりました。一つの終わりは次への始まりでもあります。今年度末に修了となる方も、この教職大学院での学びが、これからの実践に生かされていくよう、ますますのご活躍をお祈りしております。(N)

教職大学院 Newsletter **No.190**

2025.2.20 公開版発行

編集・発行・印刷  
福井大学大学院 福井大学・  
岐阜聖徳学園大学・富山国際大学  
連合教職開発研究科  
教職大学院 Newsletter 編集委員会  
〒910-8507 福井市文京 3-9-1  
[dpdtfukui@yahoo.co.jp](mailto:dpdtfukui@yahoo.co.jp)